

新 皇

清

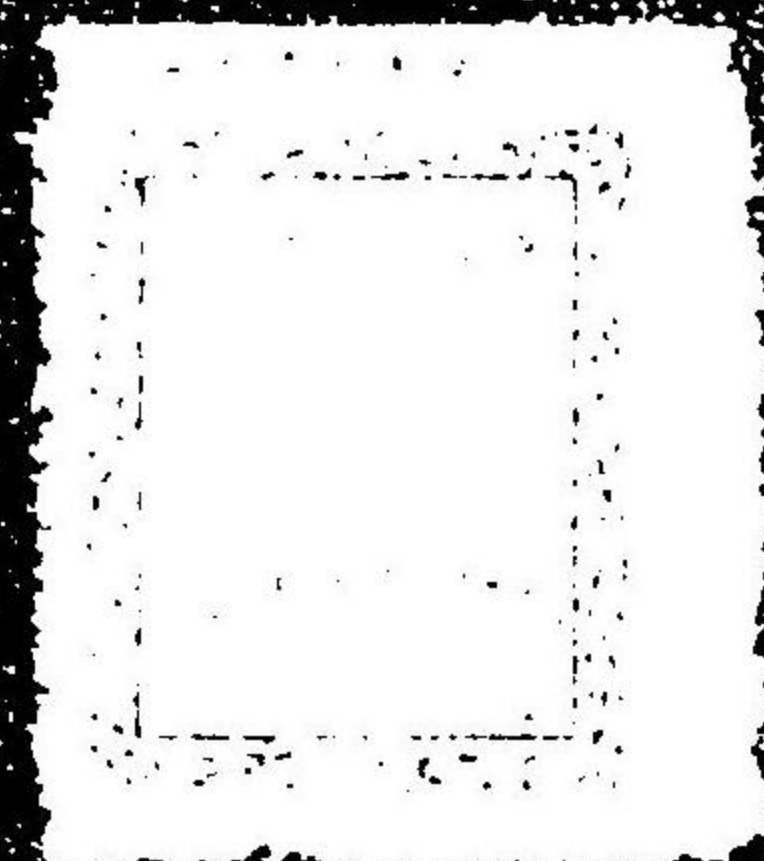
宮

司

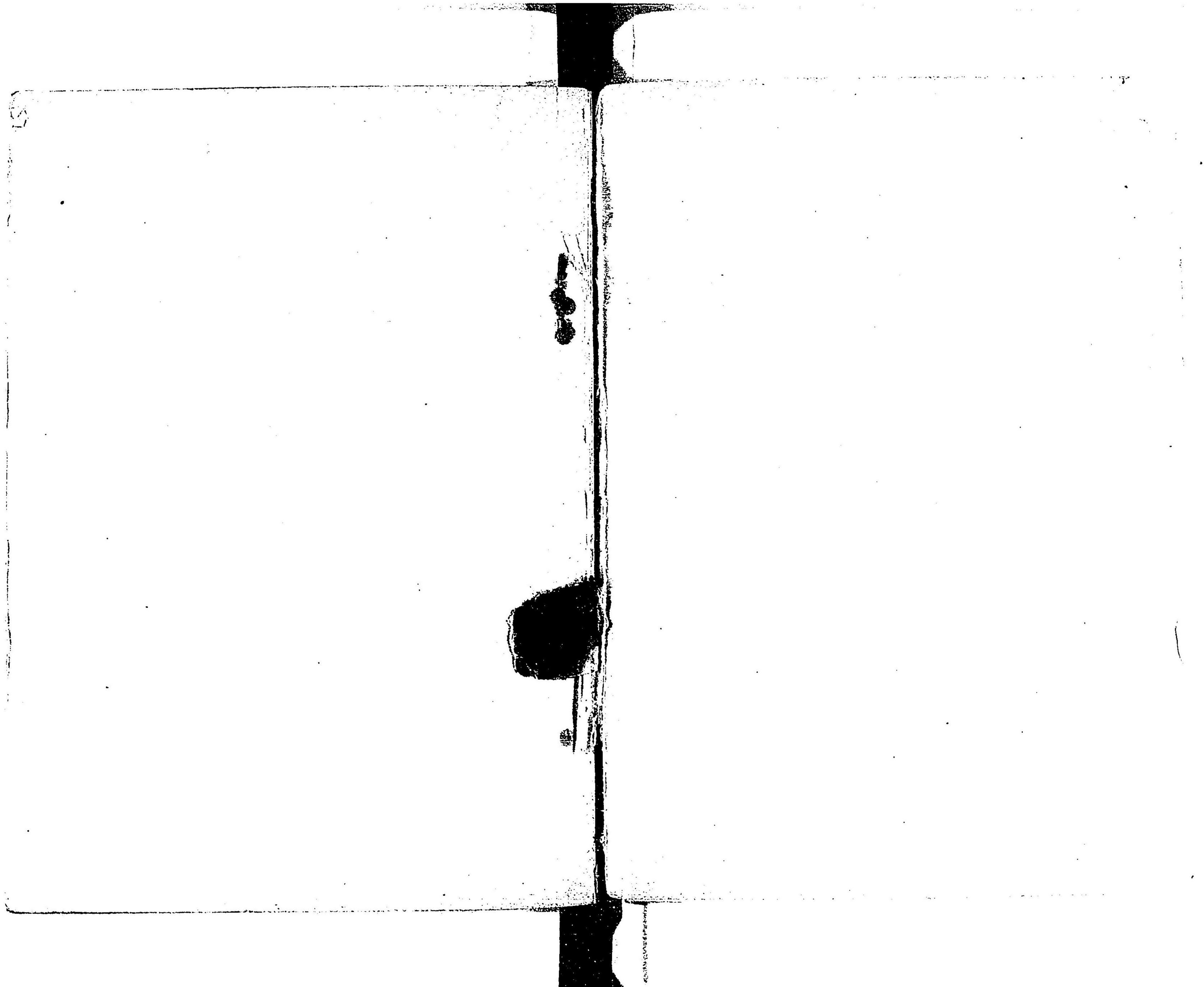
印

信

印

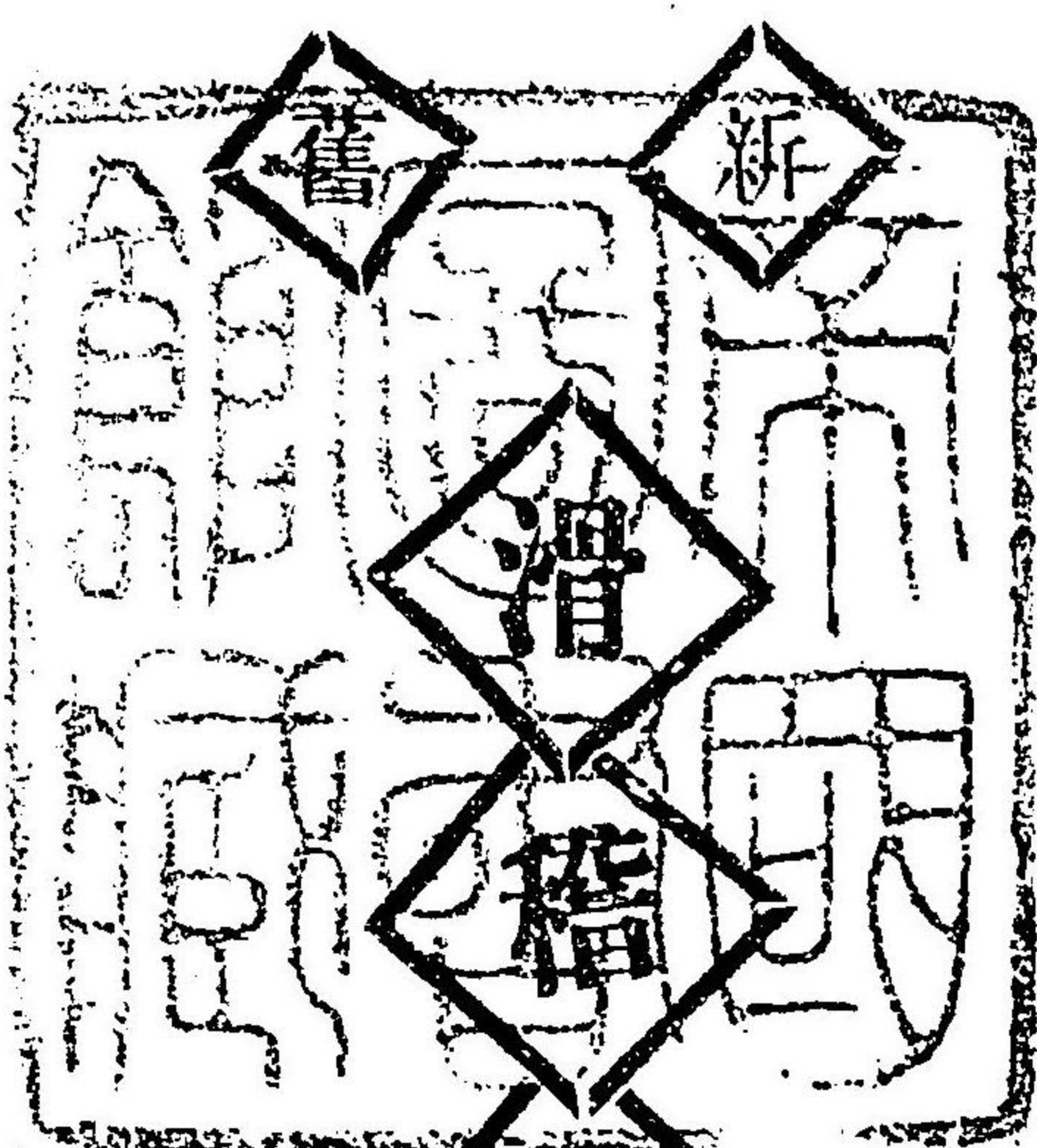








特65  
262



滑  
稽

合

戰

物

語

41 2 22  
内交





新舊滑稽合戰物語

目次

(1) 次 目

---

一	バンカラ新舊大合戦 ハイカラ	一
二	和洋料理合戦記	一七
三	鳥合戦物語	三三
四	獸太平記	七四
五	蟲合戦物語	一六九
六	精進魚類物語	二二七
七	臺所合戦物語	二五六
八	世帯道具合戦卷	二六六



九 魚獸合戦……………二七八

十 餅酒合戦……………二八七

十一 麻疹太平記……………二九八

十二 黒船退治神佛軍議……………三一二

十三 神佛合戦記……………三一八

十四 地震太平記……………三二五

新滑稽合戦物語目次終

新滑稽合戦物語

新舊大合戦

灰穀國は近來一時に長足の進歩をなして、内幕の槍栗は兎に角、表面は日に増し富強の體なり。頃は開化一百年の十二月、外交上何やら一大事起りし模様にて、内閣總理大臣千里鐵道公は文明王の御前に伺候し、數時間の後各大臣及び參謀總長に勅命あつて、俄かの御前會議、大臣は誰々を第一に陸軍大臣クルツブズドーン氏、次に海軍大臣魚形水雷氏、參謀總長空中飛行氏打連れて參内し、其他の各大臣も顔の揃ひしところにて、首相鐵道公威儀を繕ひ「今日御前



會議の次第は、諸公にも疾くに御承知で御座いませう、彼の蠻唐國に對する外交上の大事件で、御存じの如く、先年來我灰穀國より、屢々使節を遣はし、通商互市を請ふと雖も、言を左右に托して、未だ其決答を與へず、且つ灰穀國の人民と見れば、理非を糺さず、斬り殺し突き殺し、野蠻狼藉の舉動度々に及べば、此際膺懲の戦を起して、彼等の愚蒙を啓發せんとの御聖旨、諸公も無論御異論はなからうと存じますが、如何で』と云へば、魚形海相起立して『イヤ御聖旨によつて、いよく開戦と決しますれば、既に必勝の策があります』續いて參謀總長の空中飛行も雀躍して『今日の場合開戦は止むを得ません』と各大臣も之に對して否應なく、直ちに廟議一決、國民の耳には青天の霹靂、開戦の勅語は宣布されたり。其文に曰く。

天祐によりて、灰穀國の王位を踐める某、茲に汝衆庶に告ぐ、抑も我國は近來科學萬能の主義によりて、國家の利益を増進し、且つ海外諸國に對しても、有無相通するの路を開き、彼我の便益を圖り、何れの國も修好の條約を訂結したるに、獨り彼の蠻唐國は頑冥不靈なる、我の厚意を拒むのみならず、攘夷と稱して、我臣民を殺傷すること屢々なれば、乃ち膺懲の師を興して、其迷霧を一掃せんとす、汝衆庶宜しく此意を體して、國家のため協力同心努力すべし云々

と、これと同時に出師準備は整うたり、參謀總長の空中飛行は、征討大都督として海陸兩軍を統べ、旌旗堂々蠻唐國へ押寄せければ、蠻唐國に於ても、斯くこそあらんと、豫て待受けたる事として、それ



それ要所を固めたり、元より元龜天正の昔を夢みる頑固の國柄なれば、其人々の名も一風變つたものなり、中にも勇み立つたる名將勇士は

梓弓張之助絃音

(的中の城主)

草薙劍四郎切升

(焼原の城主)

龍頭兜之丞鍬形

(八幡座の城主)

緋絨鎧之進金也

(具足山の城主)

早橋布衣之助驅升

猫皮絃次郎膝乘

天保八十郎錢成

保呂懸人力引升

一足藁次郎足輕

提燈武羅之助暗照

上下麻太郎肩張

花御座紋之助敷升

蛇の目傘之助澁塗

行燈美濃守有明

四角漢次郎縱行

鬘附油之助堅鍊

丁鬘鬘四郎結高

其他一騎當千の勇士、何れも丁鬘を振り立て、手唾きしつゝ、灰殻國の奴等、たゞ一息に追ひ返せと敦圀きたり、殊に大將神風福磨は、其昔蒙古の軍勢十四萬人を吹き飛ばしたる鼻息に覺えもあれば、今度もさしたる事はあるまじと、聊か油斷の折柄、敵は忽ち國內に攻め入つて、處々の合戦、何れも味方の敗北となりたり、されども頑固一徹の蠻唐勢、死物狂に働きて、こゝを先途と戦へば、灰殻國にても若手の大將稻妻羽四郎速行、一丈有餘の角ある兜を頭に戴き、真一文字に進み來り、大音揚げて、我こそは天上界を暴れ廻つて、



下界まで其名を轟かしたる鳴神五郎五郎音高の末孫稻妻速行、方今交通機關として、總理大臣の千里鐵道さへ一步を譲る流行兒、蠻唐勢の中に相手になるものありとも覺えず、うかくして刎ね飛ばされなと、向ふ見ずに騙け出すを、早轡布衣之助驅升、小面憎く、や思ひけん、六尺に餘る身體をノタリくと運び出し、俱利迦羅紋々の陣羽織を箱根下しの山風に翻へさせ、雲助と名けたる名馬に打乗り、何を小癩な、此息杖を喰つて見よと、稻妻を打んとせしが、忽ち速行の鼻息に吹き飛ばされ微塵になつて倒れたり、之を見るより當の敵、免しはせじと競ひかゝる若武者、保呂懸人力引升、饅頭笠を猪首に着て、黒鴨の大鎧、拳固で水鼻を横に撫でながら、何でいべランメイ、鳴神五郎五郎の子孫がどうした、一年中裸で暮して、

土用の炎天でもなければ、世の中へ出られねへ破落戸ぢやアねへか、時々青天井を踏み外して、外界の厄介になる大馬鹿者、そんな奴の子孫ぢやア、碌な者とは思はれねへ、三錢均一の規則を破りやアがつて、手前勝手な事ばかり仕やがる、おまけに此の保呂懸人力に對しては、宿世の怨ある奴、其儘にして置くものかと、向ふ鉢巻の大元氣、暫く勝負を争ひしが、稻妻には到底敵はぬ體にて、初の廣言に似もやらず、二三十町追捲られて、アハヤ討死と見えたるが、横道へ外れて、稻妻の隙を窺ひ、手頃の石を拾ひ、打付けたれば、稻妻も額に大瘤を拵らへ、暫く蹶踏うところを、人力引升踏み込んで、胴中へ火を放けたれば、流石の稻妻も焦熱地獄の苦み、這ふくの體にて引退く、之を日比谷ヶ原の焼打とて、後の世までも其古蹟を



傳へたり。  
 引升に入り替つて、立現はれたるは、同じく稻妻家より出でし法師武者、光明寺爛々齋入道、續いて花瓦斯光之助、ピカ／＼として乗り出せば、此方より行燈美濃守有明、灯燈武羅之助暗照等汝れ好き敵御參なれと討つて懸る。

此時は敵も味方も勝負を一舉に決せんと、各自相手を擇んで、數ヶ所の合戦、一足藁次郎足輕は、深井長靴と取組み、鬘附堅鍊は香水齋薇助と戦ひ、猫皮絃次郎膝乘は梅尾輪太と勝負を争ひ、花御座紋之助敷升は、花形絨氈と負けず劣らず、中にも蛇の目傘之助濫塗は、其昔小野道風に随つて蛙合戦にも出でたることあり、其後小野定九郎の手下に使はれ、破れかぶれに、大坂天満の真中で、浮名を流せ

しこともありしが、今度の合戦には、日頃の恨ある深張蝙蝠を討ち果さんと、亂軍の中を付け狙ひ、漸く見付けて、やア珍らしや蝙蝠、汝は鳥にして鳥にあらず、獸にして獸にあらざる蝙蝠を名として、青天白日の下を飛歩く希代の怪物、雨の日には我々の領分を犯す不届き者、こゝで遇ふたが百年目、叩き殺して、骨はバラ／＼、屑屋の手に渡してしまふ覺悟をせよと、言りつゝ、無二無三に打つてかかれど、鋼鐵で鍛へ上げたる深張、争でか敵せん、打々發矢と二三合の打合に、忽ち骨挫け肉破れて、轆轤首を振取れて、塵塚山に無残の最後を遂げたり。  
 斯くて蠻唐國は散々に打負けて、到底敵はぬ有様となりしかば、無念ながらも、手を束ねて、灰殻軍に降參を乞ひ、向後は何事も其指



揮を背くまじとの條約を結びければ、灰穀國文明王の仰せによりて、左の條件を定められたり。

大將神風福鷹は終身禁錮の事、

梓弓張之助絃音は、閑地に退き、以後決して武装すべからざる事、

草薙劍四郎切升は、従來の服裝を改め、サーベルと改名して、ま

すく國家に忠義を勵むべき事、

緋緘鎧之進金也は、長く幽室に閉籠め、社會に立交はるべからざる事、

天保八十郎錢成は、當百の看板を懸けながら、八厘の通用にも不

足のところあれば、廢物として永代隱居の事、

猫皮絃次郎膝乘は、浮薄の行ひ多く、人心を遊惰に導く罪によつ

て重科に處すべき筈なれども、其美音は他に類なきを以て、民間にて自由の營業は勝手たるべき事、

保呂懸人力引升は、大通りの往來を禁じて、横町小路、山の手の坂

路等を通行せしむる事、

上下麻太郎肩張は、従來冠婚葬祭の式場に出で、大に威張りたれ

ど、自今以後長く休職として、人中に出づべからざる事、

提燈武羅之助暗照は、火事の卵として、疎忽の罪輕からずと雖も、

氣輕者にて、面白きところもあれば、時々出仕すべき事

行燈美濃守有明は、性來ボンヤリしたるものにて、さしたる功も

なければ、放逐の刑に處する事、

其他それく處置を受けて、蠻唐の國體はこゝ一變して、舊來の面



目を失ひ、灰殻の権力日に強く、千里鐵道は、野となく山となく、横行して、黒雲の如き氣焰を揚げ、早鞆布衣之助などは、深山に逃げ隠れて、姿を見せず、浮世を果敢なみて、山寺の物置小屋に死人同様の日を送り、行燈美濃守有明は、糊口の道を失ひて、墮落の果、吉原の遊廓に入込み、妓夫も碌々勤まらねば、片隅の部屋に押籠められ、日の光を拜むこと出来ず、たゞ勘定の拂へぬ客の番をするのみなり、提燈武羅之助暗照は、鬼燈と名をかへ、勸工場の飾り人足に雇はれなどして、僅少の賃錢を得、漸く露命を續ぎ居りしが、何時の間やら、灰殻人の機嫌を取り直し、カンテラ氏と共に、暗夜の行列といふ營業を始めたり、梓弓張之助絃音は、無事に苦しみて、何か一つ商賣をと考へたる末、淺草奥山に大弓、揚弓の店を出し、

白首の女共を雇ひ入れ、往來の人を呼び込み、鼻の下の尺度を測量して、生血を吸ひ取るより、世間にて種々の評判高く、其先祖たる弓矢八幡の耻辱とも相成る不埒の所業と、一たびは其の筋の取調べを受けたるが、梓弓は辯解するやう、私は元來正直に營業致し居れども、灰殻國より新入のビール、スイスキーなどと、目色毛色の變つた者共が、銘酒店の看板を懸け、怪しからぬ事を客に勧むる由、それに近來は新聞縦覽所、圍碁仙集所など、申すものも出來て、私の華客を奪ひ、それらが風俗を亂す行爲ありて、私まで卷添えの儀は、如何にも嘆かはしき事なり、たとへ落魄たりとて、先祖は弓矢八幡、續いて鎮西八郎爲朝のためには、數ヶ度の合戦に功名を現はし、奈須野與市宗高を助けて、八島の戦に、源平の兩軍より喝采を博した



るものなれば、飽まで其由緒を自慢に、決して後暗き所業は無しと、眞偽は兎に角、立派の申し立てなれば、其筋にても、別に咎めもなく、従前の通り、營業勝手たるべしとの事なり、蠻唐の諸將は、何れも此の如く、世に棄てらるゝ中に、昔と變らぬは、猫皮絃次郎膝乗、花輪胴の鎧に、天神卷の兜を戴きたるまゝ、新橋、柳橋、赤坂の溜池、牛込の神樂坂、下谷の講武所、數寄屋町、日本橋の葎町から、ズツと飛び離れて向島の果までも、娘子軍を組織して、當るを幸ひ、薙ぎ立て、斬り立て、縦横無盡に暴れ廻れども、こればかりは、灰殻の勢力も制しかね、却つて生捕となるものもある始末にて、猫皮の鼻息は頗る荒し、如何なる名將勇士も、此處に向つては、一戦にして骨無しの如く、坂下の項羽がグニヤク

汝を如何せんと歌ひしも斯くやと思ふばかり、緋縮緬の旗を見ては、一目にて其陣門に降服する有様、流石の文明王も此猫皮の跋扈するところだけは、別世界として、治外法權の下に置きたり。殊に憐れなるは、四角漢次郎縦行の身の上なり、大學、中庸、孟四郎、論五郎など多くの子供も養ひかねて、路頭に迷ふ始末、僅かに露の命を續ぎ居たるが、性來小むづかしき理窟を並べるが好きにて、人々に忌み嫌はるゝより、ますます不平の心抑へ難く、何時かは機會を待つて、昔の代になさんと力に及ばぬ望みを起し、同志の者を語らひしかば、何れも時代遅れの老耄共、漢次郎縦行と同盟して、灰殻人を排斥せんとの魂膽を運らせり、其人々の重なるものは、丁髷鬘之助結高、上下麻太郎肩張など、何れも新政府に反對して、黨



を結びて謀叛の企て聞えければ、文明王の下知として、横文字蟹行  
 總大將となり、征伐に向ふたり、漢次郎縦行も、最早逃れぬところ  
 と覺悟を定め、青表紙の旗を押立て、横文字の軍勢を引受け、目覺  
 しき合戦に及びたり、丁髷鬘之助は一族鬘附堅練と一手になつて、  
 迎も勝利を得られぬ事なれば、好き敵と刺違へて、冥途の土産にせ  
 んと、待ち構へたる折柄、廂髪出張太、髯野八次郎の二人、相並ん  
 で進み來り、おゝ下髷の老耄、疾うに此世を暇乞したるものと思ひ  
 しに、まだ死損つて、彷徨くと覺えたり、不便ながらも息の音を止  
 めてくれんと罵しりつゝ、打つてかゝるを心得たりと、立向ひしが、  
 廂髪出張太のために敢なき最後、廂髪は丁髷を討取つたる功によつ  
 て、文明王より海老茶袴を拜領し、之を自慢に所嫌はず穿き歩きけ

れば、往來の馬糞を掃除したり、それは借置き漢次郎縦行も、自然  
 の勢力には抗じ難く、折角の希望も水の泡となつて、憐れむべし四面  
 楚歌の聲、横文字のため散々に打破られ、以前に勝る窮境に陥り、  
 更に深く山中に蟄伏して、世はますます、灰殻風に吹き捲られ、到底  
 頭の上る時なかるべし。

## 和洋料理合戦記

### 一 白毛八十八立腹の事

抑も和洋料理合戦の濫觴を尋ぬるに、近來何事も、ハイカラ流行に  
 て、料理のはうも、バタ臭き風に吹き捲られ、從來の日本風は追々



下火したびになるより、茲こゝに日本料理にほんれうりの總大將そうたいしやう、飯山いひやまの城主じやうしゆ白毛しらげ八十八盛はちじゅうはちじゅうはち高たかには、檄文げきぶんを飛ばして、部下ぶかの諸將しよしやうを呼び集め、西洋料理退治さいやうれうりたيجの評定へうてうに及およばれける。

先まづ馳はせ集あつまる面々めんめんには、赤井味噌あかみそ之進のしん汁成じゆなり、香野物かうのもの四郎しやう濱高はなたか、刺身さしみ眞九郎まきぐらう生成なまなり、鯛野出目助たいのでめすけ濱燒はまやき、鬼殻おにがら焦九郎こけくしやう燒過やきすぎ、宇奈木うなぎ如露助にようすけ蒲燒かまぼこ、玉子半たまごはん熟齋じゆくさい君有きみあり、芋野田いものでんがく樂がく、甘井薩摩守あまみさつものかみ、餡掛あんかけのツ平つへい、鮫鱈あじご鶴つる四郎しやう、竹輪半平ちくわはんぺい、椎茸色九郎しむたけいろくしやう、其他その他舉あげて數かずふべからず、大將たいしやう盛高もりたかは一段小高だんこたかき所に、釜敷かまじきの尻しり煖ぬく々々と座ざを構かまへ、諸將しよしやうを屹きつ度見渡みわたして『此度こんどの評議餘へうぎよの儀ぎにあらず、我日わがひの本もとは神代かみよの昔むかしより、小生せがしが食物しよくもつの長ながとして、諸君しよくんの保護ほごにより、今日こんにちまで無事むじに治おさめ來きたつたり、然しかるに近來きんらい異國いこくの奴原やつはらフライと押懸おしかけ、我わが一族いそくを捉とらへて、ライス家令からい

などと名なを替かへて追使おひつかひ、此方こつちへスープの挨拶あいさつもなく、ビーフステークビーフステーキに威張かはり散ちらし、油鍋あぶらなべのチヌーチヌー肉にくい舉動しやうどう、おまけに何時いつのころツケー、此方こつちのお薩女郎さつぢやうらうを連れ出だして、お腹なかをポテイトにさせ、毒どくを喰くらは、サラダと吐ぬかして、人ひとの前まへでもこれミート云いはんばかり、甚はなはだ以もつて奇怪きくわい千萬せんぱん、今迄いままでキャベツの憐愍れんみんを以もつて赦ゆるし置おきたれど、地藏ぢやうの顔かほもサンドウキツチ、バタバタに叩たたき伏ふせて、パン殺ころしどころか、皆殺みなころしにせねば腹はらが癒いえぬ』と威丈高かたけだかになつて云いひければ、何いれもソースと同意どういして、出陣しゆつじんの準備じゆんぶに及およびたり。

## 二 鯛野濱燒勇戦の事

西洋料理さいやうれうりの方かたにては、日本料理にほんれうりの軍勢ぐんせい押寄おしよすると聞いて、防戦ぼうせんの準じゆん



備意りなく、先づ三度宇一、臘乾入道を斥候として、敵の容子を窺はせけるに、早速立歸つて注進するやう「敵は既に臺所ヶ原を打立つて、食堂山を目懸け、犇々と詰め懸けたれば、早一戦の御覺悟肝要」と云ふに、大將小麥麵包九郎焼立「ソレ者共」と下知すれば、蘇府一番太匙持真先に乗出し、續いて菜布片角四郎膝掛、頭毛喜三太肉成、皿田菜六入道玉菜、玉葱球内、海老野浮來太、於武烈玉五郎等食堂山の麓に馳せ下り、日本勢の中へ、面もふらず切込んだり。箸と肉刀の打合ふ音に、食堂山も揺がんばかり、暫らく勝負も見えざりしが、鯛野出目助濱焼、櫻色絨の鎧に、大皿形の兜を被り、大口開いてバク／＼と躍り出し「遠からんものは目にも見よ、近くは寄つて耳に聞け、抑も我先祖は、神世の昔に、大己貴命と共に、

豊葦原の瑞穂國を経營し給ふ少彦名命、即ち後の世に、七福神の一に祭られたる蛭子三郎に仕へ、暫くも其側を離れざる功績によつて、海魚中の大王に封せられ、男女の結婚、壽賀の祝ひ、吉事の儀式には、何時も第一に使はれ、目出鯛々々々と人々に賞翫せらるゝものなり、從類眷屬は大八洲の綿津見に繁殖して、殊に名高きは水島灘の櫻鯛、若狭の小鯛、沖津の甘鯛たとひ腐つても鯛と云はれて、鱗介三百六十の長なり、汝等毛唐人のバタ臭き口に這入る者を相手にするは穢らはしけれど、拙者が手料理振舞ひくれん、觀念せよ」と、大きな目を剥き出して、グル／＼と睨め廻し、赤穂の住人鹽野味好が鍛へたる亂れ焼の一刀を打振り戦ふたり、之を見て「何を小癩な先祖呼はり、肉叉の錆となしくれん」と、立向ふは、海老



野浮來太髯長、米利堅粉大荒目の鎧を着て、八足の馬に打乗り、ビヨン／＼と刎ね飛びながら「やア珍らしや鯛野出目助、元來汝の分際として、目出助と名乗るは拙者を蔑しるにしたる奇怪サ、又祝ひ喜びの席上に、汝の押出すことあるも、拙者が正月元日に飾り海老となつて、鏡餅の上に乗る目出たさには及ぶまい、一體全體鯛を海魚中の大王とは、誰が云ひ始めた、拙者は文字で書いても海老と稱して、海中の長老職、斯く腰の曲るまで、まだ一度も鯛が王となつた話を聞かぬ、如何に口が大きいとて、偽りの系圖を自慢に、無用の廣言、其分には差置けぬ、肉叉を以て其肉を剝り取り、アラは掃溜に棄て、野良犬に舐ぶらせくれん」と、打てかゝれば、鯛野濱燒莞爾と笑ひ「こは海老野髯長よナ、汝は元來日本勢の中にあ

るべさ筈、何時の間にか浮來太と名乗つて、西洋方に心を寄せた、飾り海老の講釋も、神國の元を忘れた逆賊の耻晒し、イデ二股武士の懲戒、目に物見せん」と戦ふたり、髯長如何に勇なりとも、腰の曲つた老武者なれば、忽ち疲れてヘット／＼、最と危ふく見えければ、頃毛喜三太肉成、玉葱球内、唐井胡椒を引連れて、浮來太に應援し、無二無三に突き立てば、流石の濱燒逡巡して、逃げ出したたり「やア口ほどもなき卑怯の濱燒、戻せ返せ」と浮來太が追駈ける横合より、鬼殼焦九郎燒過、赤皮胴の鎧に、龍頭の兜を戴き、浮來太の前に立塞つたり。



三 鬼殻焦九郎最後の事

鬼殻焦九郎は浮來太の顔を睨んで、これは浮來太殿、日本と西洋、敵と味方に分れても、元は一門の拙者、よもお忘れでは御座るまい。『お、忘れて好いものか』とお忘れなくば申し上げん、先づ一通りお聞きあれ、我々の先祖は元來神風吹く伊勢の國から出て、伊勢蝦の名も高く、芝蝦、車蝦、糠蝦の類まで、皆日本料理に忠勤を勵み居るに、足下獨り一族を振棄て、赤髯の御機嫌を窺ふとは如何なる御所存、此際お心を改めて、日本方へ御歸參致されよ、拙者も一族の好誼を以て、必ず御執成申さん』と諫めけれども、浮來太は呵呵と打笑ひ、拙者も其位の道理を辨まへざるにあらねど、何を云ふ

にも日本料理は舊式に泥んで、鯛野濱焼、刺身生成などが、何時も威張腐つて、我々一族を重く用ゐるす、皮を剥がれ頭を取られ、碗盛、吸物の材料となつてチヨンビリ、三角銀杏、白瀧蒟蒻齋など、同居の悲しさ、餘り踏付にしたる仕方なれば、歸參などは思ひも寄らぬ。『お、歸參のお心がなければ、止むを得ん、私情のために公義は枉げられぬ、お覺悟あれ』と鬼殻焦九郎、針金の如き髯を振つて、突きかゝれば、浮來太も心得たりと渡り合ひしが、如何はしけん、鬼殻は浮來太の肉叉を受損じ、胴中をグサと差突かれて死したりける。日本方に去る者ありと聞えたる刺身真九郎生成、これを見るより刺身庖刀を真額に振り翳し、浮來太目懸けて斬り掛る。真九郎其日の出立は、厚皮黒絲絨の鎧を着て、生草毛の駒に打乗り、雉子焼



仁王、葱間鍋之進、左右に附従ふて、獅子奮迅の勢ひに、流石の浮  
 來太も支へかねて、引退けば、頃毛喜三太代つて眞九郎に立向ふ。  
 眞九郎笑つて、小賢かしや頃毛、汝はスープの出し殻、犬に喰せる  
 も惜しいと、パン粉に糝して、ヘットで揚げた奴、云はい餘り物の  
 分際で、體裁好く客を欺く横着者、正身ばかりの拙者の相手になる  
 ものか、退り居らうと睨め付けは、頃毛も其勢ひに避易して、思は  
 ず知らず、七八間飛び退きたり、唐井胡椒主人の云ひ甲斐なきを無  
 念に思ひ、身を躍らして眞九郎の眼潰しに飛込んとしたるに、眞九  
 郎の側に控へたる山葵津萬太山成槍を扱いて唐井の鼻をツンと突き  
 抜けば、唐井は涙をポロ／＼流して其まゝ往生、玉葱球内『朋輩の  
 敵、其場は去らせぬ』と山葵の頭を肉刀にて突き崩さんと進んだり、

葱間鍋之進、進出て、『やア玉葱、同じ葱仲間でも、其方は始終牛  
 や豚を主人に持つ穢れ者、目に物見せん』と罵れば球内も負けぬ氣に  
 なり『何を小癩ナ、其方こそ刺身の屑、油身の棄てどころを、貰ひ  
 受けて、臭い物共の寄り合ひ鍋、立派のお座敷に出ること叶はず、  
 縄暖簾の一膳飯屋で、雪の日に車夫や馬丁を喜ばせるが關の山、料  
 理の仲間に這入ると云ふが身分を知らぬ迂怪者、たゞ一思ひに此世  
 の引導渡してくれん』と、ころ／＼轉がりながら、葱間の足元へ付  
 け込めば、鍋之進大に怒り、グラ／＼と沸騰したまゝ、球内の坊主  
 頭へボシヤリ、球内は大火傷をして逃げ出したり。



### 四 老須美婦的齋討死の事

さても西洋方は刺身眞九郎に斬立られ、しどろもどろになりければ、於武烈玉五郎君有齒噛みをなし、如何にもして盛返さんと、一人踏止つて奮撃突戦、アハヤ討死と見えたるを、日本方の大將白毛八八『彼は於武烈にあらざるや、希代の勇士、元を糺せば鳥の子の一族、日本方に因縁のある者、むざ／＼討取るも不憚なり、誰か生け捕り来れ』と云ひければ『仰せ畏まつて候』と慕地に乗り出たるは鳥の子萬丸厚焼、玉五郎の側近く寄つて、無手と組み、暫く揉み合ひしが、大地に轉げてコロ／＼、厚焼力や勝りけん、玉五郎を取つて押へ、細を懸けて八十八の前に引据へたり、西洋方は大に敗北し

て、皆々城中へ逃げ込まんとしたるに、大將小麥麵包九郎心外に思ひ『手始めの一戦に打負けては、今までの苦心も水の泡、是非日本勢を打破らさば再び城へは入らぬ』と馬の頭を立直したり、之に勵まされて部下の面々『大將討たすナ』と聲々に呼はつて、陣立を改め、勝ち誇る日本勢に打つて懸る。中にも老須美婦的齋厚切、西洋方にて第一の剛の者、肉叉と菜刀を左右に打振り、敵の本陣を目懸けて、無二無三に斬り込んだり、宇奈木如露助蒲焼『相手に取つて不足なき老須厚切、さア来い来れ』と二本の竹串を以て支へれば、老須は嘲笑ひ『竹串を以て、菜刀に向ふとは大膽な奴、其志の殊勝さに、相手になつて遣はず』と打下す菜刀も、油でツルリ、數刻の戦鬪に、流石の老須も精根盡きて、己れか身よりジツ／＼と油汗



を流し、數ヶ所の負傷に、赤い血が滲み出し、如露助のため敢なき最後を遂げたり、如露助大音揚げて『西洋方に隠れなき老須美婦的齋を、宇奈木如露助討取つたり』と呼ばれば、西洋方は最早これまでと、死物狂ひに荒廻り、三度宇一は御壽文司五目齋に討たれ、皿田菜六入道玉菜は薄井紋太焼海苔に生捕られて、大將麵包九郎も數多の部下がバタ／＼と討死する體に臆氣を生じ、城中へ逃込んだり。

### 五 入道揚成仲裁の事

茲に金獄羅山の城主油鍋沸立入道揚成は、其先祖が西洋料理に出でたるもの故、日本勢にも附かれず、堅く中立の地位を守りてありけ

るが、西洋料理敗北して、其命旦夕にありと聞くより、憐れに思ひ、日本勢の本陣に來りて、大將白毛八十八に面會し『抑も今回の合戦は西洋方餘りに増長して、我儘を働くより、足下の怒りに觸れ、雙方確執に及びたれども、此の如く勝負の見えたる上は、爾來西洋方も大に懲りて、無禮は致すまじ、何卒拙老にお任せあつて、和睦の儀偏へに願はしう存する』と云ひければ、大將八十八も打點頭き『おう戦争に勝つたる上は、足下の御仲裁にまかせん』と至極寛大なる返事に、揚成も大に喜び、西洋方の大將小麥麵包九郎にも、其旨を云ひ聞かせ、遂に和睦に及びける、揚成は差詰め、米國の大統領ルーズヴェルトの格にて、流石の大戦争も治まりければ、兩陣より其慰勞として、大宴會を開かれたり、有合せの馳走とは云ひ、双方腕



を揮つての待遇にて、各自隠し藝を出し、先づ西洋方よりは、牡蠣野浮來の骨無し踊大喝采を博し、愛須栗忌はヒヤ／＼と手を叩き、日本料理よりは鮎入道のスツボン踊、酢蛸和尚の天蓋踊、これは八本の足を頭に被つて、座敷中を飛び歩くなり、勝尾武士郎は、麻上下に大小を差して、茶番を演じ、松茸香四郎はお龜の面を被つて、女の身振、何れも大出来なり、揚成は酒酣にして中央に突立ち、『さて兩大將共これほどの大戦争をオレンヂにお任せ下すつて、互の意恨をサラダと水に流し、チヨコレートも根を残さず、奈良漬にお茶漬のサツパリとした心持、愚老は元より法衣を着た身の上、俗事に拘はらぬ筈なれど、ツイ油の乗つて口が滑つて差出た申し條、何卒御勘辨に預りたし』と挨拶し、兩軍は左右に別れたり。

# 鳥合戦物語

## 第一回 巢九郎爪長生立の事

羽蟲三百六十、鳳凰之が長たりとは、大戴禮に記する所なり。されども斯る陳芬漢語は、十百年の昔と過ぎ去りて、惡鳥世にはびこり鴟梟は母子相喰み、熊鷹は爪を抜かるゝまでも、慾深く振舞ふにぞ、聖人君子を氣取る鳳凰は、何處へか隠れて見えす、後は諸鳥食を争ひて、己が名のとり込む事のみ專一とする中にも、北海の邊に住む巖上巢九郎爪長と云へる鷺の一族あり、元は氷上に棄てられし鷺の卵なりしが、お鳶と云へる寡女が、憐れに思ひて拾ひ取り、雛に解



して育て上げたり、一體此お鳶は、旅から旅へと渡り歩き、是と定まる營業もなく、掃溜の隅などより、魚の腸の腐れたるを拾ひ、之を喰ひて飢を凌ぎ、それも得られぬ時は、使小供の携へたる油揚げ類を掻浚ひなどするより、人皆晝鳶と稱して憎みける、其上扮装も甚だ穢苦しく、年中薄鼠色に汚れ腐りし衣服一枚、更に着替へるといふことなければ、人皆鳶色と稱して嘲り笑ひたり、身體には年中蟲の絶ゆることなく、折々は人間にも之を移し、鳶とて大ひに忌まる。

借も巢九郎はお鳶に育てられしが、お鳶が他の物を奪ふを見やう見真似、自分もコン／＼盗み始めしが、生質剛愎にして力飽まで強ければ、コン／＼稼ぎはまただるしと、他の鳥類を捕へて手荒き所業に

及び、果は肉を扯き裂き喰ひ、生血を啜るなど、残忍至極の振舞を縦いままにし、悪逆日々に増長せしかば、他の鳥類は何れも屏息して恐れ戦き、驚大明神として敬ひ崇むにぞ、巢九郎は遂に北海一面を己が領地とし、荒鷲山に城郭を構へ、家來眷族を集めて評議するやう、我は元素性も知れぬ孤兒にて、路傍に棄てられしを、お鳶が情に今日の如く生ひ育ち、一國の主となりて、北海一面我手に入りたれど、尙未だ我望は十分ならず、養母のお鳶は常にビエートロトロと鳴きしより、我は其鳴聲を名とし、ビエートロと呼べども、薯蓣汁が好きといふ次第にもあらず、何日までもビエー／＼風車にてあらんよりは、目に見る物誰彼の區別なく、此方へ取らう／＼と云ふ意なり、我今日の盛大を致せし基は、矢張お鳶の遺志を繼ぎた



るなれど、尙是より東南に當りて、燕の都鶏の林あり、あれを我手に握らずんば、爪長が本意にあらず、因て今より彼處を攻取る用意肝要なるが、こゝにまた東海の一孤島に蜻蜓洲の國あり、古き歌にも、

蜻蜓早く燕になれよかし

上見ぬ鷺の空を翔れば

と云ふ歌あり、蜻蜓は其形小なれども、化して燕となれば、我を苦しむる非常の毒あり、殊に亦彼國には、武士道の守り本尊なる弓矢八幡の使に、八幡鳩宗といへる大將、軍陣の駆引に妙を得たれば、中々以て侮るべからず、十分手ぐすね引いて馳せ向ふべしと下知を傳へ、其準備に取懸れり。

### 第二回 谷の戸梅之進夫妻詩歌贈答の事

日の本に名だゝる弓矢神の神使八幡大和守鳩宗と云へるは、健斑鳩命の御裔にて、平生は三枝の禮を守り、温和の如く見ゆれども、一旦事あれば勇猛比類無し、此度荒鷺山の巢九郎爪長貪慾非道にして燕の都鶏の林をも攻取らんと魂膽ありと聞き、隣國の好誼傍觀するに忍びずとて、合戦の用意に及び、夫々一門へ下知を傳へたれば先づ馳せ集る勇鳥の面々、

和歌の浦の城主蘆邊田鶴丸脛長

加茂の城主池中主水家味

雁山の城主田寄文太夫一列



沖の城主千鳥群太夫波住

法華經山の城主谷の戸梅之進好音

焼野の城主雉子劍四郎春長

其他宗徒の郎等數多あり、斯くて軍議を疑したる末、兵は神速を貴ぶの古語に従ひ、是より直に打立て、敵の不意を襲ふべしと、押出したる有様は、凜々しくもまた花やかなり。

先づ第一に法華經山の城主谷の戸梅之進好音大將として、其日の出立は、金小札蒔黄緘の鎧に、南蠻鐵の小手脛當、倉庚と名けたる唐土傳來の兜を着し、天満宮より授けられし梅鉢の旗章、笹啼と云へる名馬に打跨り、七字の題目を鐫りし太刀を佩きたり、抑も此太刀には由緒あり、昔蒙古忽必烈大軍を以て、我朝に仇せんとしたる時

日蓮上人立正安國論を著はし、鎌倉幕府の怒りに遭ひ、龍の口の法難を始め、種々危きことありしかば、常に一口の戒刀を所持せられき、是れ即ち法華經山の寶物として、當家に傳はりしが、蒙古退治の縁起もあれば、荒鷲征伐には屈竟なりとて、妻の初音御前が取り出で、夫の前に捧ぐれば、梅之進は打喜び、能くこそ心付きたり幸先好しと、陣刀として腰に佩びたり、其時初音御前首途を祝して一首の歌を詠す。

荒鷲の住むてふ野邊の醜草を

斬りはらへ君此つるぎにて

春知らぬ北の胡に東風吹かせ

わが法華經の歌を聞かせん



梅之進幾回か繰り返して感吟し、例もながら吾妹子が歌の妙なるよ  
いで我も一首認めんとて、短冊に記すを見れば、

一竿旗影妙蓮華。

鬼上官名海外譚。

我劍南無鑄三七字。

長征萬里靜胡沙。

初音御前打誦じて、法華經の旗風に、八道の草木を吹靡かせつる清  
正公にも勝りし我夫の武者振勇ましや、天晴功名を現はして、凱陣  
の程を待ち待ると、玉を轉ばす嬌音にも、凜としたる雄々しさ、目  
に一滴の涙だになし、さるを古今集に『鶯の凍れる涙今やとくらん』  
と詠みしは嗚呼の癡漢よ、巽軒博士の不審しみ給ふも實に道理なり  
元來梅之進は風流を旨とし、雙柑斗酒を携へて、例年春の野邊に詩  
歌の筵を開きけるが、文事ある者は必ず武備ありとかや、此度の太

事に臨んで、先陣を承はりぬ。

さて相従ふ面々は、雲雀飛太郎高成、鶉權平逸足、子規山の入道不  
如歸齋、五月田佐内喰名、金利谷島之助傳等、前後左右に列を正す  
中にも雀忠太夫數有は忠義一圖の郎等にて、舍弟忠之進、忠之助、  
子息忠太、忠次、忠三等、二十、三十、四十雀、數多の眷屬一同に、  
忠々々々々と鳴き立てたり。

第二回 諸鳥將出陣の事

次に二陣の大將は、加茂の城主池中主水家味、是も風雅の道に心を  
寄せ、覺鴨仲間の歌詠みなり、されば扮装も悠に優しく、南蠻鐵の  
鎧に、同じ兜を入首に戴き、水色の狩衣を上に着り、一切味と名け



し重代の刀を鷗尻に横へ、芹毛と云へる青の名馬に打跨り、郎等には比翼尾四郎仲吉、青籠鳴太夫、水底鶉之助、川瀬見隼人、都鳥歌人、鶉判官等何れも由緒正しき者共なり。

第三陣の大將は、焼野の城主雉子劍四郎春長、雉子色の鎧に、青赤黄だんだら染の陣羽織を着し、頭に兜の代りに、赤き冠を戴き、蛇切丸と云ふ寶劍を佩きたり。

第四陣 雁山の城主田寄文太夫一列は、先祖が後三年の戦に、伏兵ある事を入幡殿に告げ知らせたる恩賞に賜はりし重代の甲冑を着し、葦毛の駒に打乗り、佩刀は名にしあふみの住人、堅田入道落雁坊が丹精籠めて鍛へし業物、手には立月と云へる弓を携へ、箆には大雁股の征矢を指し遠くより望めば牛蒡を負ひしに異ならず、このたび

の合戦には是非功名を顯はして、雁門の太守を承はらんと、特に勇み立ちて見えたり、而も文字の技に拙なからず。其昔漢の蘇武が匈奴に拘はれ、氷雪の中に苦し折、詩を作る事を教へられ、爾來江湖の詩人とも、應酬の作多ければ、此度の出陣に臨んで一律を賦す。

秋風萬里到瀟湘

羽翼差池帶塞霜

聲落夕陽紅蓼岸

夢寒明月白蘆鄉

遠翔寥廓免曾繳

久在江湖求稻梁

千歲豈忘蘇武節

無端又賦雁門行

乃ち蘆管を以て筆となし、碧雲箋を劈いて之を書き、吟誦數回、其聲、唳唳として律呂に叶ひ、諸鳥何れも感歎す。

第五陣は即ち總大將八幡大和守鳩宗の本陣にて。大將軍大和守の出



立如何に見れば、是も八幡殿より拜領したる白絲絨の鎧に、珠數懸と名けし兜を猪首に着け、白檀磨きの弓の真中握り、二十四差したる白羽の矢を負ひ、布穀丸と云へる太刀を佩き、馬上優に乗り出したる其骨柄、威風凛々、實に總大將と見受けらる、後に續いて副將軍和歌の浦の城主、盧邊田鶴丸脛長、鎧の上に白綾の直垂を着し日の出の前立打たる丹頂と云へる兜を戴き、四邊まばゆきばかりにて、馬廻りは孔雀文五郎、山鳥長四郎、野狩鷹之丞、鴻大膳、鴉巢近江、刻葦行々子等、本陣の左右を固めたり。

夫より遙か引退りて、沖の城主千鳥群太夫波住は遊軍として、後詰に控へ、客將鷲の宮の別當田中五位尉高躬は、朝廷の任官ありて、月卿雲客にも立交らふ身柄なれば、別に手勢を引具して遊軍の中に

あり、すは時刻は好しと合圖の太鼓を打鳴らせば、すんくのんのんと陣押の有様、勇ましかりける次第なり、

第四回 河津雅樂頭 大龜美濃守加勢の事

斯る處へ馳せ参じたる一手の軍勢、何者ぞと見てあれば、河津雅樂頭飛行、大龜美濃守長壽真先に進み、先手の大將谷の戸梅之進に向つて一禮し、河津雅樂頭先づ口を開き、某鳥類にあらすと雖も、谷の戸殿とは、古今集の序にも、花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲聞けば生とし生けるもの、何れか歌を詠まざりける、と書かれし所縁あるを以て、此たびの大事、餘所に見棄てがたく、加勢のため推参仕りたり、あはれ大將軍に其旨言上あつて、御人數の隅に御加へ下され



と、両手を大地に突き、禮義正しく四角張り、目玉をバチ付かせて後の方なる大龜美濃守に目くばせすれば、美濃守は其語を継ぎ、某はまた田鶴丸殿と千年萬年の昔より、鶴龜々々と、一口に云はるゝ、肥懸の間柄、數ならぬ身なれど、河津殿と同様、如何なる御用なり仰せ付られ下されたしと、赤心を現はして他事なく述べければ、梅之進打喜び、早速右の一條本陣へ通達に及び、總大將大和守鳩宗直に見参すべしとて、大龜、河津を本陣に招き入れ、鳩宗は最鷹揚に汝等縁かの所縁を以て、加勢に来る事祝着々々。就ては河津は梅之進の手に加はり、大龜は茲にありて、副將軍田鶴丸を輔佐し、忠勤を勵まれよ、合戦終らば其功によりて、それぐ恩賞を行ふべきものなりと、おごそかに下知を傳へしに、兩名は大將軍の御指揮、

畏つて候と言上し、大龜は兩掌を合はせて伏拜み、河津は感涙を流して、背中のビシヨ濡れになるを覺えざりき。

第五回 鳥勘左衛門副將軍田鶴丸を嘲弄する事

大將大和守は重ねて河津、大龜に打向ひ、汝等鳥類にあらざるさへ、義を見て爲ざるは勇なきなりの本文に従ひ、早速味方に馳参じたるに、心得難きは、庭鳥漏刻博士時繼入道五徳齋なり、抑も彼が先祖は、天照大神の天窟戸に隠れ給ひし頃より、常世の長鳴鳥と云はれて、我國とは一方ならぬ間柄、況してや此たびの戦争は、荒鷲山の爪長、庭鳥の本國鶏の林を横領せんと企てたるより、我々義兵を



起し、其危急を救ひ呉れんとするものなるに、其を知らぬ顔に打過ぐるは奇怪千萬と、氣色ばみて見えしを、副將軍蘆邊田鶴丸押止め、否庭鳥氏は韓詩外段にも其徳を稱して、頭に冠を戴くは文なり、足に距めを附くるは武なり、敵前にありて闘ふは勇なり、食を見て相呼ぶは仁なり、夜を守りて時を失はざるは信なりと、是れ五徳齋の名の起る所以、將軍江海の量を以て、暫く其去就を御覽せよ、と諫めけるに、傍にありし鳥勘左衛門眞玄、ナニ五徳とは鐵五徳か、土焼の五徳か、五徳が有難ければ、蠟燭も大明神なり、彼に五徳ありと云はば、我々の仇なる猫にも五徳ありと、天性の口悪は、場所柄も顧みず、醜き嘴尖らして、田鶴丸を擲擲すれば、田鶴丸顔色を變じ、猫の五徳とは珍らし、聞かん語れと詰寄つたり。

鳥勘左衛門は田鶴丸の怒れる體を見て、愈憎さげに嘲けり笑ひ、ははア副將軍ともならうものが、猫の五徳を御存じなきか、御存じなくば、後學のためお聞かせ申すべし、むかし萬壽寺の杉師と云へる和尚、一疋の猫を畜ひ、客に語るやう、此猫、鼠を捕へざるは仁なり、鼠に食物を譲るは義なり、客膳の前に蹲まるは禮なり、食物を隠し置くも探し出して盗み喰ふは智なり、冬の朝は必ず庵に潜り其時を違へざるは信なりと、庭鳥の五徳も亦かくの如し、のみならず渠奴近來女に惑溺して、政道大に亂れたり、牝鷄の晨するは、是れ家の索るなりとは古人の金言、さればこそ荒鷺山の巖上巢九郎が、鋭き爪に懸けんとするなれ、田鶴丸殿御邊も其先祖は、泚水の戦に臨んで、秦の符堅八十萬の軍勢を破り、風聲鶴唳の語を、千歳の下



に留めたる武功の家柄なるに、今は時々人目を忍びてお浮かれ筋、楊州とやらに飛び込み、命の洗濯、十萬の腰纏を一文無しに遣ひ棄て、ぼんやりとして立歸り、我々の眷屬に阿呆々々と嘲けらるゝを口惜しとは思召さずや、されば懦弱者を指して、此頃の流行語にづると云ふ、づるとはつるの濁りじなり、斯る大呆氣を副將軍としては、我軍の勝利覺束なし、其れに心附かずして、無謀にも荒鷲征伐などゝは阿呆らしい、抑も荒鷲山の一族は何れも武勇勝れし者共、斯る燕小僧の軍勢何百萬向うとも、一障へもあるべからずと、掃溜を突き立て、魚の腸の腐れたるを啄み、まだ其臭ひの失せやらぬ嘴を尖らし、四邊を憚らぬ雜言過言、物狂はしくぞ見えにける。

第六回 烏勘左衛門悪事露顯追放の事

烏勘左衛門の悪口に、大將鳩宗初め並み居る諸鳥呆れ果て、流石寛仁大度の田鶴丸も大に怒り、味方にありて味方を罵り、敵の強きを説く不届者、軍神の血祭りに之を誅せずんば叶ふまじ、手討にして骨も肉も打碎き、蠟燭焼にしてくれんすと、佩刀に手を掛け立上りしが、大將鳩宗之を制し、否々斯くも心の腐りし奴、斬り棄つるは刀の汚れ、と云ひも終らぬに、御注進々々と叫びて、飛び來る者あり、誰かと思れば雀忠太夫、吐く息忙しく、ちうくちう進の次第餘の儀にあらず、何より先へ之を御覽せよと、一封の手紙らしき物を、大將鳩宗の一覽に供へしかば、鳩宗は何事ならんと、手



に取り見るに、鳥勘左衛門より敵に内通の書状なれば、鳩宗も赫と怒り、汝鳥勘左衛門何時の間にやら、敵方の間諜となり、あることないこと種をほじくり、荒鷲山へ内通する由兼て聞及びしが、よもやと心を許せしに、此一通にて事明白に相成つたり、然るに今も今として、副將軍たる葦邊氏に對し、悪口雑言のありたけを並べ立て、味方の心を惑はして、離間せんとの企みよナ、と聲をあらうげ叱め付くれば、勘左衛門も今は堪らず、ぶるくと戦慄ひ出し、一言の返答なければ、大將鳩宗一議に及ばず、孔雀文五郎に命じて、其罪状を記さしむ、文五郎は孔子の遠裔にして、世説に所謂夫子の家禽なるものなり、一たび管を援れば、五采の文章燦爛として錦の如し、杜子美は之を評して、翠尾金花と稱へ、韓退之は翠角高獨聳、金華

煥相差と贅す、されば今に至るまで、文人墨客争つて其片言隻辭を購ひ、机上に置きて其文采を賞揚す、管て都護の官を辭してより、筆を載せて軍に従ふ事屢々なり、閑話休題、文五郎案に對して、思を費さず、翰を揮ふこと飛ぶが如く、直ちに判じて曰く、猿猴は人より一毛少きを以て人たる能はず、鳥は鳥より一畫少きを以て鳥に伍すべからざるなり、然れども赫々たる赤鳥は維れ日の精、玉兔と相並んで光明世界を照す、白頭鳥は角を生じたる馬と共に、燕の太子丹を扶けて秦より脱れ還らしめたり、汝其一族に生れて醜黒墨の如く、性亦喧噪にして食殘、雀巢を覆へして其雛を奪ひ、死屍を啄みて其臭を知らず、或ひは鳥有先生と稱して荒誕を恣しいまゝにし、或ひは鳳凰に擬して黒鳳と僭し、或ひは



鳥賊と變じて海中を横行し、其の罪固より數ふるに違あらず、今や羽族三千仁義の師を興して、兇暴を誅せんとするに臨み、敵に通ず、其姦邪毒惡鴟梟も爲さざるところ、實に希代の黒賊と謂ひつべし速かに斧鉞の誅を下すべきなれども、汝幼にして反哺の孝あり、白居易も詩を作りて鳥中の曾參と稱せり、加ふるに熊野權現の庇護あるによりて、特に死一等を減じ、之を境外に追放するものなり。

八幡大和守鳩宗判

文五郎嚴かに之を讀み上げしかば、大和守それと下知して、勘左衛門の甲冑を剃ぎ取り、陣門の外に追ひ出したり、諸鳥之を見て、小氣味好しと囃し立てければ、勘左衛門は悄然として其場を立退きぬ。

第七回 深井慾右衛門熊鷹討死の事

斯くて一同は隊伍整々、荒鷺山を指して發向せしに、巢九郎爪長も追々の注進にて此事を知り、猶豫はならじと防戦の用意に及び、先づ一門の深井慾右衛門熊鷹に、三千の兵を授け、敵を中途に喰ひ止めよとて、出陣せしめ、次に木兎入道に夜討の計を授けて、敵の不意を襲はんと待構へたり。さて寄手の軍勢は野となく、山となく、雲霞の如く群々と押寄せて天地に響ける羽音夥しく、其昔富士川のほとりにて、平の惟盛が東國の源氏を征伐せんと馳せ向ひし、二十萬の軍勢を追ひ散したる有様も、斯くやと覺えて、凄まじいなど云ふばかりなし、敵は名にあ



ふ勇猛無双の惣右衛門熊鷹、年古る松の梢より、此方をきつと見渡して、は、先陣は谷の戸梅之進と覺えたり、碌々舌も廻らぬ鋭意、摺餌にも有附かねて、可憐命を棄てる覺悟よな、いで其分なれば、唯一握みに握み殺して、極樂往生を遂げ得させん、者共續けと、何の思慮なく血氣にまかせ、眞一文字に走り出す、其出立は黒絲絨の大鎧に、同じ毛の兜、馬は野荒しと名けたる太く逞ましき逸物に、虎斑の革鞍置いてヒラリと打乗り、鳶口に似たる鎌槍を、電光石火と閃めかしつ、面もふらず寄手の中へ飛び込んだり、それと見るより旗下の小鷹、若鷹、四十八鷹を始めとして、大將討すな續けや續けと、曳々聲にて無二無三に突懸る、谷の戸梅之進此體を見て、ほ、天晴なる熊鷹の軍振、向ふ見ずの猛者なれば、尋常の手向ひし

て味方の士卒を損ふなと、一段餘りサツと退き、左右に分れて中を通す、熊鷹は勇氣に逸り、云ひ甲斐なき寄手の奴輩、手並は知れしぞたい一息に追ひ捲れと、段々深入りして、寄手の二陣池中主水の前へに切込みしが、豫て謀計のありしと見え、今まで左右なく、打つてかゝらざりし谷の戸の軍勢、俄かに熊鷹の後を遮り、前後左右より攻立つれば、流星の熊鷹も、瞬く中に味方を失ひ、手始めなる大事の合戦に打負けては、何の面目あつて、再び大將爪長公に見ゆべきと、少しく猶豫ふところへ、谷の戸梅之進突と馳せ寄り、如何に熊鷹、最早遁れぬところなるぞ、速かに降参せよと呼はるに、何を小癩なと攫みかゝる、折しも早業に名を得たる雲雀飛太郎高成、ヒラリ身を躍らすと見る間に、熊鷹の頭上に舞ひ上り、圓なる左右



の眼を突き立てければ、血潮颯と迸しり、さしもの熊鷹も盲鷹となりて働き自由ならず、地上に撲地と落ちたれば、残卒は一支へもななく右往左往に逃げ散りぬ。

第八回 爪長驕慢百舌姫を寵する事

借又荒鷲山にては、剛情我慢の大將、巢九郎爪長、飽まで寄手を侮りて、高の知れたる寄合勢、我片腕と頼みたる熊鷹を、討手に差遣はしたれば、鳩宗の首實檢せんも近きうち、それ者共前祝ひに一獻催さん、酒宴の用意と驚の一聲、左右に並居る小鳥共、畏つて候とやがて持出す酒肴、爪長は最と悠長に蓋を取上げ、數獻を傾けて眼もトロリ、ヤア〜氣の利かぬ汝等が迂怪、酒の席に美女なきは、

暗の夜道に提灯持たぬより淋し、余が氣に入りの百舌姫は何處にある、言ひ付けずとも早く連れ参れと、罵り喚けば、馬糞鷹平と云へる近習の士、へい申し上げます、御不興の段御尤もに候へ共、百舌姫様只今御前へ伺候致さんと存じ候處、御髮の亂れを掻き上げ、御化粧最中、成るたけ美しい處を御前の御目に懸けんと、イヤ最う一生懸命濃厚とめかし居候間、暫時御猶豫の程を願はしう存じ奉ると、仇口交りに追従云へば、爪長聊か機嫌を直したる體にて、左様か、成るたけ美しい處を予に見せたいと百舌が申したか、左様か、あは……と、又大蓋に満々注がせてぐいと一千し、折柄襖を開きて徐々と立現はれし百舌姫、爪長が前に平伏し、我君様には何時も御氣色麗はしく、お目出たう御座りますと、言葉のまだ終らぬに、爪



長は圓なる眼を三日月よりも細くし、おゝ百舌か、大いに待草臥れ  
たぞ、汝は待たるゝ身になるとも、待つ身になると云ふ事を知つ  
て居るか、あは、……、サア近う進め、一獻遣はさう、もつと近  
うと、膝の邊へ招き寄せ、イヤ百舌よ、汝が其美しい處を予に見せ  
たいと申したと、タツタ今馬糞奴が予に知らせて呉れた哩、そりや  
全く眞實の事か、百舌姫は斯くと聞きて、アラ忌な鷹平、そんな事  
を御前へ申し上げて、私や耻かしいと、左右の振袖をもて顔打掩へ  
ば爪長は笑壺に入り、あは……、眞實の事と見えるな、どうぢや  
百舌よ、例もの汝が美音で、何か面白き謠ひ物が所望ぢや、と云は  
れて百舌姫は何やら歌ひ出したり、歌の節はチツチクチツチクチ  
チーチクとのみ聞ゆれども、之を人語に翻譯すれば左の如し。

鷺が國さアで、取りたいものは、東滿洲朝鮮までも、義理も人情  
も見分けは付かぬ、返かれまいぞへ哈爾濱ほとり、心外  
爪長は歌に聞惚れて正體なかりしが、俄かに心付きたる如く百舌姫  
に打向ひ、さてもく面白き小唄よナ、予が心を十分に云ひ盡して  
餘蘊無しぢや、誰の作り替へしものぞ、隠す語れと尋ね問ふに、百  
舌姫は暫く躊躇ひ、何方でも御座りませぬ、不東な私のいたづら、  
若し御意に戻りしところあらば、幾重にもお詫び申しますと云ふに  
爪長いよく感心し、儲もく、縹緞の勝れたるのみか、斯程のた  
しなみあらんとは、予も今日始めて承知せり、それもこれも、一つ  
は爪長が武運の程を天神地祇も、感應あつて、汝が口を借りて示し  
つるか、あゝら喜ばしやと、大口開いて笑ひ興じたり。



第九回 物集女百太郎智勇の事

爪長は益々大恐悦の體にて、百舌が得意の美音を聞かせたる上は、  
 汝等も黙つても居られまい、銘々何なりと隠し藝を出せ、無禮は許  
 すと一言の下、馬糞鷹平始め部下の小鳥、甚句活惚都々逸義太夫、  
 飛んだり跳ねたり踊つたり、種々の藝盡しに餘念なき折柄、御注進  
 御注進と、宙を飛んで立歸りたる早房隼人、射懸けられたる箭を抜  
 きも去らず其まゝ負ふて、酒宴の席へ躍り込めは、巢九郎爪長嚇と  
 怒り、又しても早房奴の狼狽やう、只今勝軍の前祝ひに、快よく一  
 獻酌む處へ、其扮装にて飛び込むとは何事ぞ、コ、此の粗忽者奴が  
 と叱り付くれば早房は動乎と座し、絶々なる息を吐きながら、エ、

情ない我君様、前祝ひとは何事で御座ります、敵は名にあふ八幡大  
 和守、軍の駆引神變不思議、味方は唯一戦に打負けて、流石剛勇無  
 雙の慾右衛門殿も、谷の戸梅之進が手に敢なき最後、某も御覽の如  
 く數ヶ所の深疵に、危ふき處を斬り抜け、漸く一條の血路を開  
 き御注進に參つたり、此事君へ申し上ぐれば、最早用なき我生命、  
 一足お先へ冥途の旅立、御免候へと、差添抜きて咽喉に突立て、二  
 言と云はず死したりける、之を見るより一同は互に顔を見合はせ  
 て酒も一時にさめ肌の、羽毛を抜かれて、寒水へ漬けたる鶯の如く  
 なり、流石の爪長も案に相違、呆れて語もなかりしが、百舌姫は如  
 何しけん、突と立上りて座の中央、面白げに打笑ひ、舞を舞てぞ居  
 たりけり、爪長は不審の眉を打擗め、こりや百舌よ、熊鷹奴が思慮



足すして、高の知れたる寄手に打敗け、討死したるは笑止なれども、  
 初度の合戦に味方の敗北、餘り嬉しきものにもあらず 汝は心の狂  
 ひしか、此場に於て舞の手振、それは暫く見合はせて、此爪長が自  
 ら出陣、寄手を慶殺にする時まで待ちやれやいと、云へば百舌姫嘲  
 笑ひ、振袖を引ちぎつて仁王立、今迄とは打て變りし勇鳥の骨相、  
 ははは……ほざくな爪長、汝が悪運はいよく盡くる時來る、我  
 を誰とか思ふ、百舌姫などは眞赤な偽り、八幡殿の幕下に於て、  
 小體なれども打物取つては、其名の聞えたる物集女百太郎舌長と知  
 らざるか、豫てより汝が眼大なるにも似ず、女に目のなき性質と聞  
 き、姿を扮して忍び入り、飽まで汝を愚弄して、此城の要害、隅か  
 ら隅まで繪圖に認め、八幡殿の御手許へ差送り、又軍の次第も逐一

注進に及び置たれば、八幡殿には座ながらにして、勝算胸にあり、  
 それも知らずして前祝ひとは事笑可し、先刻予が歌ふた唄にも、汝  
 の強慾無殘を諷したるに心付かざるか、殊に心外と云ひしは、汝が  
 所業を憎むの餘りに出でしなり、最早遁れぬ處なれば、此場に於て  
 潔く切腹せよ、不便を加へ介錯をして取らせん、如何に〜と詰め  
 寄れば、爪長無念の齒齧みをなし、チエー失策つたり殘念よナ、と  
 は云ひ爪長が武運はまだ盡きぬぞ、先づ血祭りに汝のひッ首打落さ  
 ん、覺悟をせよと、傍なる大刀引抜き、抜き打に切付ければ、物集  
 女は早くも身を替し、何處ともなく飛び去つたり。



第十回 木兎入道、袋尾五兵衛夜討仕損

ひの事

茲に又木兎入道、袋尾五兵衛の兩人は、爪長より、夜討の計を授られ、寄手の來る時刻を考へ、林の中なる朽木の洞に姿を隠し、今か今かと待ち構へしが、慾右衛門熊鷹の討れたるも知らず、晝の間はぐつすり寝込みて、黄昏の頃目を覺まし、それより刻下の士卒を率き、間道を迂回りて、寄手の背後に出でたるが、一向敵らしきものに出會はず、林の中を彷徨きて、漸く一隊の軍勢篝火を焼き、野營を張るを見受けたり、イザ御參なれと、夜討を仕掛んとせしが、篝火の光眞晝を欺くばかりに面を向くべきやうもなし、袋尾五兵衛

不審の體にて、偕は我等林中の虚洞にて寝入りしたため最早夜明に間近き頃にあらずや、夜が明けては盲同様の我等とて進退も意の如くならず、入道殿は如何思召さるゝやと、尋るに木兎つくゞ彼方をながめ、さればなり、彼處に見ゆるは慥に日輪、ほんに是は貴公の云はるゝ如く夜も早明け放れたりと、寄手の陣中に日の丸の旗押立て、篝火に輝やくを、眞實の朝日と見違へて、左右なくは進み得ず暫く評議に時を移し、とても夜明けでは我等の性として叶ふべからずと、元來し道へ引返し、山路にうろく彷徨く中、夜は全く明けて、鯨波の聲山野に響き渡る、袋尾木兎の兩將も、戰慄き恐れて、傍なる朽木の虚洞に再び姿を隠す、大將既に此の如くなれば、之に附従ふ士卒共も、臆病風に誘はれて、更に生きてる心地なく、各自



草叢の中、又は堂宮の庇の蔭に、呼吸を殺して潜み居たるが、寄手の軍勢は、威風凛々、平押しに押し来る、中にも雀忠大夫數有、一族郎等を引具して、斤候の役を承はり、敵の伏勢やあらんと、其處此處怪しき場所に探りを入れ、少しも油断なかりければ、早くも木兎、袋尾の隠れし虚洞に目を付け、ちうくくくと騒ぎ立つれば、木兎入道最早脱れぬところと覺悟を極め、袋尾五兵衛と共に飛出せど、旭の光に眼を射られて、盲目同様、進むことも退く事も出来ずして、一つ處に蹲踞れば、忠太夫の一族寄り集りて、終に之を突き殺し、殘兵も悉く討死を遂げ、逃るゝものは最と稀なり。

第十一回

爪長防戦不如歸齋入道最後の事

儲も巢九郎爪長は、物集女百太郎舌長を、女とばかり思ひしに、案外にも八幡大和守の間牒にて、此方の機密を漏したるは何より不覺其上深井慾右衛門を討ては、勝負の程も覺束なしと打萎れ、如何はせんと思案の處へ、又しても二度目の注進、夜討の計略を授けられし、木兎袋尾諸共に、空しく最後を遂げたりと、聞いていよく驚き呆れ、叶はぬまでも防戦の用意に及び、夫々手配りして、城を嚴重に堅めたり、寄手は早くも城下へ押寄せ、攻太鼓の聲、矢叫びの音凄まじく、無二無三に城門目掛け攻立れば、巢九郎爪長大に焦燥ち、叶なはぬところと觀念しながらも、平生我武者の性質なれば、掠鳥權助、鶴の怪藏等の郎等數千騎を隨へ、城門を颯と押開き、潮の如く寄せ来る敵の真中へ、驀地に駆け込んだり、寄手は此有様を



見るよりも、ソレ巢九郎が切死の覺悟にて討つて出でたるぞ、爪長もいよく往生觀念佛、脱すな、討取れと、犇き合ひ、双方火花を散らして戦ふたり、爪長其日の出立は、黒絲絨の大鎧に、灰色の陣羽織を着し、兜着巾を戴きて、鐵爪と名けし熊手に似たる鎌槍を携へ、馬は名にあふ奥州栗毛、六尺ゆたかの大男ゆらりがつしと打乗りて、走ること疾風の如く、眼は宛然雨夜にきらめく電光、勇猛無双の大將なれば、寄手も暫くは近き得ず、只遠卷にして矢襖を作り雨霰と射かくるを、爪長事ともせず、怒り狂ひ、さて云ひ甲斐なき寄手の奴輩、我と思はんものは名乗を上げて勝負を決せよ、冥途の供奉を申付けんと罵れば、寄手の中より子規山の入道不如歸齋、卯の花絨の鎧を着て、有明と銘打たる長刀を振かざし躍り出で、や

ア巢九郎爪長、此期に及んで其廣言、望に任せ、息の根止めてくれんづと、駈け向へば、爪長は身構へして、何を小癩な不如歸齋、死出の田長の名を取りしは汝の事よな、冥途の道案内には不足無しイザ來い來れと吼り立ち、鐵爪にて唯一握みと進み寄り、双方秘術を盡して戦ひしが、如何はしけん不如歸齋、爪長が打下す鐵爪を受け損じて、眞額を打割れ、たツた一聲此世の名殘、血反吐を吐いて倒れたり、あゝ憐むべし不如歸齋、先祖は蜀の望帝より出でたりとか、兎に角由緒ある身にて、詩歌の道にも暗からず、風流を旨とする者なりしが、敢なき最後ぞ是非なけれ。



第十二回 荒鷲山滅亡論功行賞の事

巢九郎爪長が死物死ひの勇戦に、不如歸齋の討たれしより、寄手の面々、一度にドツと押寄せて、短兵急に攻立つれば、流石の巢九郎も散々に討たなされ、味方を顧みれば、最早悉く枕を並べ討死し、残るは己れ唯一騎、此上は所詮免るゝ道なし、せめては寄手の大將八幡鳩宗と差違へん心にて、荒れ廻る折しも、雁山の城主田寄文太夫一列が、狙ひを定めて、よつ引いてひやうと放つ矢過たず、爪長が咽喉頸にグサと立つたり、急所の痛手に流石の猛將、馬より眞逆さまに落ちたるどころ、谷の戸梅之進突と馳寄り、法華經の太刀を抜くより早く、首打落し、大將鳩宗の實檢に供へたり。

大將既に討たれたれば、何の苦もなく荒鷲山の城は寄手に乗取れ、多年北海に暴威を振ひ、悪逆をほしいまゝにしたる巢九郎爪長も、あはれや朝日向ふ霜と消え、雞の林は諫鼓苔蒸して太平を歌ひ、燕の都も春秋の社日に、家々醉人を扶けて歸る穩かさ、常津風枝を鳴らさぬ御代の榮え、千代を嘖づる雀の忠義、それに引替へ鳥勘左衛門は、反側の臣として、諸鳥に憎まれ、一族諸州に流浪して、人の物を掠むる盗の類、又は掃溜の隅より餌をあさりて、總かに其日の飢を凌ぐ有様となりぬ。

偕又諸鳥の功を論ずるに、谷の戸梅之進好音は、先陣の手柄あるのみならず、巢九郎爪長が首を打落したるによりて、第一と注せられ百花の魁たる梅の咲く頃、諸鳥に先つて、上絡し、春を掌どれとの



有難き恩命、雁山の田寄一列は、一矢にて爪長を射落したる功をもて、秋を掌とれと命せられ、物集女百太郎舌長は間諜となつて、荒鷺山の機密を探りたる奇智妙計賞するに餘りありとて、小身ながら鷺、鷹の名跡を賜はり、長く鴟鷹と名乗るべしとの事、其他雀忠大夫等を始め、何れも夫々功勞によりて、恩賞の沙汰に預りしは、芽出たかりける次第なり。

# 獸太平記

鹿左衛門諸將と群會す

清濁わかれて陰陽和し、陰陽和して萬物生し。萬物一心にしてみ

な一心なり、人は聖代の仁慈に和し、草木禽獸は雨露の恵みに和す、實や一寸の虫にも五歩の魂、けだものといえども各其主あり、爰に一村繁華の地あり、あしたには夜をこめて煙を立、ゆふべには水音の高を聞て休す、近郷近在ならぶ所なし、或日隣家の猫、軒をつたひ聲高して妻を乞、又同じき村の犬は人を吼て、來る處に彼猫を見付て、やゝしばらくならみ付、猫は恐れて尾をふとめ、爪を立てうなり居けるが、終に軒より落けるを、彼犬やがて一口にくはへ、二ふり三ふり振かともえしが、忽に死てけり、彼猫の妻小猫ども一所に寄て、大になげき是非敵をとらんと企て、先此よしを國主の鹿左衛門に訴ける、かゝる所に、此ほど方々より頻に悪黨共蜂起し盗人共多く、此訴を聞事櫛の齒を挽がごとし、是によつて左衛門は、



大將軍白象王に其事を告しらせければ、汝其職に預る上は、宜取はからふべき由なりければ、急ぎ諸將を集に、猿兵衛人近、馬行衛尉馳飛、鬼浪江之尉月餅、栗鼠一學棚行、貂伊織年經、駒小主水穴行、騾小貳早飛、其外手下のものを引ぐし、各評定所に入る時、大將の幕下に勇將智將あまたありといえども、漸右之面々凡馳まいる、其外一獸も來らざる事、いかゞしたる事ぞやと、鹿左衛門いたけ高に申されければ、猿兵衛すゝみ出て曰、將軍怒りを止給え、某おもふに將軍は智仁勇の大將、をのゝ世に知所なり、法を寛仁に定め、人民の家を荒さず、山野田畠をそこなはず、只捨たるを喰ひ人の施を食す、若此法をやぶる時は、皆をのゝ罪せらる、然るに近年人の施しすくなく、其上各奢を極め、酒宴遊興に

費を多くし、喰所のもの甚不足せり、是によつてをのづから山野を荒し、田畠を損ず、將軍の法尤嚴密なるによつて、其罪を恐れ大身小身ともに國に交代せず、おのづから皆分離して山野にのがれ、一城を築みづから王と稱して、權柄日々に盛にして、一向將軍の下知を用ひず、是によつて獵人も其みだりなるを惡で、晝夜鐵砲の音肝をひやす、是皆將軍のしらざるつみにして、皆是背くものゝ罪なり、此度幸に、猫彈正三毛うたれたる序に、第一は此無道をたし給へと申ければ、各是を金玉の論なりといつて、將軍狐疑する事なかれ、我々命を捨て忠を致さんとすゝめければ、鹿左衛門打うなづき、是眼前の利至極せり、其無道を討べしと、急ぎ飛札を以て、大將軍唐勇將軍普賢白象王に報ず、白象王諸將をあつめ、我神朝へ



来て此國の徳にふくし、聖賢和朝の風に習て、今また諸獸の王となる、是又我に過たる大幸、よつて其身をつしみ、法を改鹿左衛門を國守とする所にはからざりき、無道の奴原亂を引出す、諸將の思慮も同じからん、是捨置べきにあらずと、急ぎ白象王ひそかに夜にまぎれて、大王に奏せんと駿州の蓬萊山にゆき、大王麒麟君に此むねを奏しければ、ひそかに勅して白象王に任す、爰におゐて國に歸り、諸將と議して、此事を鹿左衛門に告しらす、是によつて、左衛門は諸將を集議して申けるは、我聞狐宇賀次郎は、大才智謀孫吳に彷彿たり、彼今山城國紀伊郡稻荷山に堅城を築、大王と稱して、猛勇の諸將を己が郡に交代させ、其面々は、深草、城山、伏見、六地藏、醍醐、谷口、三栖、芹川、富森、淀、大下津、竹田、中島、秋

山、赤池、鳥羽、塔の森、島村、石原、横大路等に在勤して、各々國々を分地して、其勢遠近に振ひ、中々たやすく敵しがたし、汝等いかなる高見かある、時に猿兵衛すゝみ出て、先一通の書翰を送て、其つみをせめたまへ、其上異議におよば、是を責ん、いやしく其つみをせむるとも、何ぞ彼したがはじ、只是より直にせめ給へといふ、是をみれば馬行衛尉なり、左衛門は諸將の評議を聞て、猿兵衛が申處利ありとて、終に一翰をしたゝめて是をもちて敵にゆかんものをみるに、驥小貳すゝみ出て、某ゆかんと急ぎ、稻荷山へと出けるが、跡より兔浪江之尉馳來り、御邊は御用あり、それがし代ゆけよと仰を請て來りたりと、引かはりてぞ急ぎける。



狐 宇 賀 次 郎 稻 荷 山 の 王 と なる

爰に狐宇賀次郎化智といふもの、元は鹿左衛門が手下にありしが、  
 國法をやぶり、其頓智衆に越たるを慢じて、終に謀叛を企て、此所  
 に王と稱して、稻荷山に名を高し、鹿左衛門は有てなきがごとくな  
 りけるぞうたてけれ、殊に今日は二月初午とて、大に手下の者をあ  
 つめ、酒宴をなして、其身は春菊の間に坐して、金銀の費を惜ず、  
 金山銀山の穴、或は朱のほくらに坐し、名酒を汲、小豆飯からし  
 あへなど、八珍の油揚、美女をあつめ舞うたふ、或記に曰、二月初  
 午の御祭禮は、和銅年中三ヶ峰に、顯形の内二月初午に相當るより、  
 恒例の祭事あり、倉稻の縁によつて、鈴でんばの陶器、五穀等を求

るを第一とす、是によつて其身は當社貴賤群集の參詣を高さ所より  
 見下し遊びける、時に犬守門といふもの、あはたしく群集を押分  
 馳來る、宇賀次郎は是を遙に見て、彼が來る氣色、只事にあらずと  
 亭中に歸りければ、犬守門太息をついて申けるは、此たび鹿左衛門  
 の大王の罪をせめ、其上某が手下のもの彼左衛門が幕下の、猫彈正  
 と口論してころしぬ、是も一族の事なれば、大王の御身に敵し、いま  
 兎浪江之尉を使として、君の罪をせむ、只今爰に來ると、大舌たれ  
 て申ける、宇賀次郎は打うなづき、尤左こそあらん、驚べき事にあ  
 らず、兼て某計ひ置たりと、先在勤の面々をあつめ、敵の使に威  
 をか いやかさんと、月輪禪定岩熊、羊十干鹿似、牛九郎左衛門長舌、  
 鼠忠藏家荒、犬守門人吼、土龍一平土行、狸入道法眼、先是等のも



のども、在番の大身宗徒として、威風凛々として待かけたり、程なく當番の兵いで來り、只今南都將軍鹿氏よりの、客來通すべきやと窺ければ、書院へ通せと申す、程なく兎浪江之尉狐公の前に禮をなし、座を定て曰、將軍別てより恙なきや、汝珍しく爰に來て、我に罪をせめんとす、是いかなる故ぞ、兎は諸將の前をも恐れずして曰、某古の情を思ふて將軍に説、大王元某とは同友なり、何ぞ君の命にそむき、よろづ無道なる、夫我君は春日大明神を守護し奉り、仁慈賢明の名を得給へり、是に背き給ふは如何なる故ぞ、早く一輪を披見して、主公の慈愛に恵れ給へと、一輪をさし出す、宇賀次郎大に怒、胸をうつて汝しばらく待、披見して後これに答んとひらき見るに、

汝國守の命にしたがふべき所、乍恐麒麟君、白象王の命に背き、汝に賜所の、小豆飯の外に、田島を荒し、人を化、同族を害し、町々に豆をふらし、うすの目を切、寢所の家棟を踏ならし、格外の變術異法みだりに行ひ、ほしるまゝに官位を汚し候事、其罪かろからず、今改るにおひては本領に安堵すべし、如何く答申べき者也。

二月壬酉

春日將軍鹿左衛門藤原三笠

狐宇賀次郎殿

見終て彌大にいかり、一輪を引きさきく、席を立て兎にいつて曰、汝に返翰すべしと、幕下の猛將宗徒のもの十萬餘を記せし卷物あり、此勢を引ぐし此方より責寄べしと、兎に差付けければ、兎大にいかり、



是等の奴原取にたらし、芝居の番付も同前と、寸々に引さき捨ければ、座中こらへかね、夫繩かけよと下知して、穴牢へ引といかりければ、月輪禪定岩熊、制しておしといめ尤御怒りはさる事なれども、只耻をあたへて追返し給へと、諫けれども彌いかつて聞入す、終に獄やへ引立る、爰におゐて宇賀次郎は、月輪禪定岩熊を後陣に定法性寺大路に置、一手は九條に陣を取、中軍みづから三萬の兵を率て、三の橋に陣を取、扱羊十干を先手として、藤の尾より一里先に陣すべしと申されければ、羊十干是をあやしみ、藤の杜と申所は候へども、藤の尾と申す所は存せぬよし申ければ、狐宇賀次郎大に笑ひ我年へたるまゝに、昔の事を申たり、將軍あやしき事をいひ給ふものかな、信實の和歌にも、

深草は名のみなりけり藤のもり、春をかけてそ花咲にけり、宗祇の句にも、

夏かけて藤咲杜の若葉かな、

かゝる詠吟もあるものをとあやしみければ、狐王の曰、是より北滑谷邊に至て、藤の杜の神地あり、むかしは御旅所大佛殿の北にあり、秀吉公大佛殿草創の時、荒廢す、滑谷の西御旅所の北に櫻町あり、氏子神役を勤、今は祭の日の橋の南武鴉社あり、此社は藤のもりの末社なり、此邊まで神幸なし奉る、元藤の尾といふ所は、今の稻荷の社地なり、元藤杜の社此所にあり、稻荷の社山上より山下に移さる時、藤のもりの社今の地に移さる、故に藤のもりの縁起に、山城の國紀伊郡、藤の尾の靈地に垂跡すといふ、然る時は藤の尾の社



は、藤のもりの神なるべし、三才の童子も能知事なり、汝しらすば我にしたがひ學べしと、悠々寛々として手分既に定り、未明を約して席を立、時に月晴深樹涼風を帯、露聊に輝き、いとおもしろく侍れば、庭中をさまよひけるが、急度心付、彼兎浪江は獄屋にいかゞして、居やらんと兵に尋けるに、息の音も聞えず、今は死たるもしれず候と申す、是によつて獄屋をひらき、見れども見得ず、是によりさかせ共行方しれず、此よしを報じければ、宇賀次郎は漸と案じ出し、實や兎は月の光を見ては、いかなる箱に入置ても、立歸るといふ事ありと申せば、皆々其高見にふくして、既に其夜も更にける。

鹿左衛門謀狐兵をやぶる

爰におゐて、驥小貳は、此度の使者を振替り心よからず立歸る所に、鹿左衛門對面して曰、汝が辯舌張儀にひとし、然りといえども晏平仲が才なし、汝が形ちいさければ穴門より通さんもしれがたし、其時は耻辱を得ん、是によつて呼返しぬと申されければ、驥も才智賢明の大將と、心に感じて館に歸る時に、鹿左衛門は南都に有けるが、道の程遠ければ、相樂郡笠置の城に入て、多の英雄を集ける、此笠置の城と申は、昔醍醐天皇の御城にして、山の北西の方に本丸二の丸有て、其通路甚けはしく、七町ばかり少下て、一ツの城門あり、其北に貝吹岩、遠見山とて、絶景の所なり、東北に望は、有市大河原飛鳥路村、目の下に見ゆる、日本無双の名城とかや、是によつて、鹿左衛門は、兎の歸るを待間ほどなく入來り、しかぐの



事どもにて漸遁れ歸れりと申、左衛門は諸將に向ひ、今はさやつ原を討亡さんと、先諸軍に下知して、綴喜郡平岡荒木村の邊に出で向ふべしと申ければ、馬行衛尉これをとめて、中々たやすく敵しがたし、某一軍を率へ、綴喜郡の北に出、將軍は後陣を召れ、猿兵衛を中軍とし是より渡し口までは二十三町餘もあれば、直に此川を涉らん、此川の廣き事一町、深さ六尺餘ありと聞なれば心安し、夫より湯舟村裏白峙より、奥田へ下り、長山を出て池尾より宇治郡大宅村に出、此所に御陣を召れ、某狐王と戦時、將軍は其虚なる所を責給へと申ければ、是我心に叶へりと、即座に三千餘の兵を集、おもひくりに打立ける、左衛門は牛尾山、音羽山に屯し、此邊に栗栖野といふ所あり、今は馬脊坂といふ、此所に一ツの墓あり、鹿左

衛門此墓を拜して曰、某此度逆賊を平ぐ、其功を顯し同類の歎を救たまへと、高聲に念じければ、皆々是を恠しみ、是いかなる墓にて候ぞ、此墓は大納言正三位兼右近衛大將兵部卿坂上の大宿禰村麿の墓なり、弘仁二年五月廿三日、丙辰歲五十四奄然として薨給ふ、我此徳を感じて拜するなりと申ければ、皆々尾を振首をたれて感ける、扱又狐宇賀次郎は、今やくと陣太鼓を現にも睡ず、はや先手は豊後橋まで羊十千陣を出す、此橋の長さは百三間廣事四間なり、此所に四方山を咏むるに、昔秀吉公此宇治見山に城を築給ふ、指を折ば文祿二年なり、風景また面白き所なれ共、今は草露の岡と成ぬと、いと心佗て居たりけるに、向ふの方に土煙を立て、一軍を引て馳來る、羊は是を見ていかれる眼さかさまに立、敵の大將よつ



先に立出、甲は輝角頭、身には雑色の鎧を着して、鹿左衛門が子鹿王丸、羊は是れにあたらんと甲の角を日に透し、たけなる毛の色いろの鎧よろひを着て、眼まなこに神しんはなけれ共黄色きせきいろに黒くろく一文字いちもんじの形なりあり、蹄ひづめは青あをく角つの白しろく、威かをかゝやかして突つて入いる、馬行うまのゆきまのじやう衛尉ゑい是これを見て、互たがひに一言いひことの詞ことばもなく、たけなる黒髪くろかみ大おほいに亂みだれみ、身みには栗毛くりげの鎧よろひを着し、一歩いっぽ一飛いっぴかけ向むかふ時に、鹿王丸しかわうまる羊ひつじに向むかふて曰いはく、汝等なんぢら君きみに背そむひて逆臣さかしくしんをたすく、若降もしかうさん參ませすんば一いいきに責せめ敗やぶらんと、或あるは嘶ひい飛とあがりければ、羊ひつじは其利そのりに結大つむりおほいに驚おどろき、一いさへもさへずへすにげ走はしり、勝かちに乗のつて大勢おほいの、群立むらがりたちたる中なかへかけ入いり、右往左往うわうさわうにかけ立たてしかば、亂立みだれたちてぞ走り行ゆく、狐王こわうは急いそぎ救すくはんと鼠忠藏ねづみちざう馳はやり來きたり、羊ひつじをたすけて、精力せいりよくを盡つくし戦たたかひけれども、猶危なほあやふく見みへければ、狐王こわうははせ出いでて、頭かしらには宇賀うがの

神玉かみたまをいたゞき、身みには白糸しろいとおどしの鎧よろひを着し、みづからは是これをさへる所ところに、敵てきの軍中ぐんちゆうより猫次郎ねこじらう虎似とらにといふもの、父ちちのあだを報はせん、此軍中このぐんちゆうにあり、其力そのちから能よく干から鯉しを引提ひつげ、鯉節かっせふし十連じゆれんをひく、彼鼠忠藏かのねづみちざう藏ざうを目めかけ、只ただ一口ひとくちに食殺くひころしける、狐王こわうは是これに氣きをくれして逃出にげし、さんぐくに走はけるが、後陣ごぜんの方かたよりあはたゞしく報はじて申まけるは、鹿左衛門しかのさゑもん謀はかりを以もつて、みづから大軍たいぐんを引ひき、某それがしが陣せんのうしろにまはり、山科やまのしなの方ほうより醍醐だいご小栗栖おぐら小野鳥辻おののりつじ諸方しよほうよりわかれてせめ來きたり、我本城わがほんじやう稻荷いなぎの内裏ないりも敵てきにとられ、或あるはうたれ或あるは降り、是これによつて味方みかたの後陣ごぜん、禪定岩ぜんぢやうい熊内裏くまないりを救すくはんと、勇ゆうを振ふるふてむかふ所に、敵てきの大將たいしやう、猿兵衛さるべゑにさへへられ、戦たたふ所に又敵またてきの大將たいしやう、鼬いたち小主水こしゅゐといふもの、大音だいおんあぐると聞きえつゝ、忽火たちまちひもへ出いで、鼬いたちは下知いたちして残のこらず焼殺やきころ



せと、おめきける所に、味方の大將、牛九郎左衛門岩熊を救ふとて、馳來る所に、鹿左衛門みづから來て大に戦ひ、また某と狸法眼と命を捨て、内裏を守る所に、敵の大將兎浪江、栗鼠一學にせめられ、終に城を奪とられて、某等兩人既に猿の手にかゝる所に、猿兵衛は今少しの所に退屈して、圍を解し故、各命をたすかりき定に猿智慧なりと笑へ共、大軍多く討れ、後陣の様子もしれず、あれ御覽候へ放火天をこがし、大軍爰に來る、大王はやく此所を立のき給へ、愛宕郡鞍馬山こそ古城の跡、此所には手下の一族も集め候へば、まづ此所へ落たまへとす、む、狐王は委細に聞て涙をながし、立べき様もしらす、かゝる所へ落集る兵四五疋はせ來り、此様子を見ていかいせんとおもふ所に、敵の方にて勘當せられし、悪馬一疋爰にね

むる、是屈竟の事と、狐王をのせ參らする、狐王は乗もならはぬ狐を馬、見ぐるしきありさまにて、鞍馬山へと落て行く。

猫次郎謀賢臣を害す

爰に鹿左衛門大に打勝、諸將長追なせそ、とて放火を鎮め、稻荷山を奪取、札を出して己々が食分を犯さず、仁慈にふくせしむ、日あらずして各大に悦び、馬行衛尉を重く用ひ、豆一千石を賜、笠置南都に残る大將より、勝戦を祝して諸の獻上山のごとし、時に後宮に獨の美女あり、常に狐王甚愛する事他に越たり、今狐王遠く落去て、美女は此後宮にありて名をおきつといふ、鹿左衛門は勝にはこつて心を寛して、彼おきつを愛して日夜酒を好み、猶又おきつは



才智ふかきものなれば、彌是に愛せられける。時に此頃左衛門が近習の中に、貌長く眼たれて、ちからもなき風情にて、阿房らしく見ゆる狐ども多くあり、汝等は狐王の手にありし時は、何役をかつとめけるぞ。さん候我々は狐王の傍をはなれず、朝夕御寐覺の御伽をも仕候小性役のものにて候、扱は狐の若衆ならん、氣のぬけたるも斷なりと打笑ひぬ、爰に又狐王は、漸鞍馬山に落延て、彼是其勢百にたらず、いかゞして敵にあたらん、將軍愛給ふ事なかれ、某ひとつの謀あり、是を見れば土龍一平なり、某敵の陣に行て、彼おきつをたのみ、謀を教て内より亂をなさしめん、然る時は手を動かさ敵をやぶらんと申所へ、犬守門申けるは、某先に手下の犬どもを差遣し置處に、左衛門甚おきつを寵愛して、酒色に長じ訴をさか

すと申す、是幸ひの時なり、去ながらいかゞして忍びゆかん、御心安く思めせ、某地の中を行て、謀を教申すべしといふ、汝其ごとくならば我何をか憂とせんと、即座に地の中へ入にける、時に西風來て草木黄落、小鳥は里に囀る、狐王は古郷へ歸るべき手だてなく、木の實草の實を喰ひ盡して、今は諸將も喰べきものもなく、漸岩熊が手の平を諸將に嘗させけれども、又岩熊が喰べきものなければ、牛九郎左衛門がすゝめに寄て、先此所に犬守門をふれがしらとし、諸國の救ひをもとめ兵糧を拵べし、其間君はしばらく、人間の腹中をかり、宜所に食を求給へ、岩熊も是より山中をへて、食をもとむべし、牛九郎左衛門も涙ながら、某も百姓の手に身をかくし持もならばぬ重荷をはこび、露命をつなぎ申べしと、各ちりぐになり



別わかれ出でる哀あはれさよ、爰こゝに又また鹿左衛門しかのさゑもんは甚はなはだ奢おごりに長ながじ、おきつに迷まよつて諸しよ將しやうにも對たい面めんせず、晝夜ちゆうや深しん閑けんに入いり評議ひやうぎをせず、是これによつて群臣ぐんしん諫いされどもきゝ入いれず、ある時ときおきつは左衛門さゑもんが醉まみにふして、能よく寝ね入いたるをみて、深しん閑けんを立たち出いで、化粧けいざん殿でんにひとり沈ちん吟ぎんして居かたりしが、月つきは草木くさきの露つゆに氷こほり、北山きたやまは雪ゆきを積つくり常つねよりも聳そびへ、まことに昔むかしなつかしく、うきを觀くわんじて立たち上ある所に、こなたの庭にはの岡山をかやまに、はらくと土崩つちくづれて泉水せんすいに落おち入いる、いかなる故ゆゑやらんと見みる所に、忽たちまちあらはれ出いたるは土龍うごも一平いっぺい穴あな行ぎやうなり、おきつは見みるもなつかしく、はしり寄まりたがひに安否あんびを語かたり、涙なみだと共に申まをしけるは、某それがし爰こゝに来きる事こと、しかくの事ことにて、此この謀はかりをおしへまいらせん爲ためなりと叫まこびて、長居ながわは恐おそれと、なくくわかれて、もとの穴あなへぞ歸かへりける、其夜そのよも明ありて、けふは當社たうしや

の御火おひ燒たなればとて、おきつに饗應もてなして、さまざま好物かうぶつを求もとめ、己おのれが好所よきところに百倍ひゃくばいす、時ときにおきつは庭にはに出いて遊あそびさまよひしが、松まつの一葉はの風かぜに吹落ふきおちて、おきつが毛けの間に、挾さしはさむ是これを取とりてくれよといふ折をりふし、馬行衛尉うまのゆきゑのじやうてい庭ぢやうてい中ぢやうていまでも巡見じゆんけんに只ただひとり出いしが、是これを聞きて何心なにこころなく、彼松葉かのまつはのちりを取とりける、鹿左衛門しかのさゑもんは是これをはるかに見みて、大おほいあやしむ所に、おきつは庭にはより歸かへり、君きみの御覽ごらんありしもしらず、馬行衛尉うまのゆきゑのじやうてい某それがしにたはむれ候さからふと、泪なみだを流ながし申まをしければ、左衛門さゑもんいかる事こと大おほいにして、是非ぜひにも及およばず、行衛ゆきゑを獄屋ごくやに押おしこめける、爰こゝに又また猫次郎まねじらうは左衛門さゑもんにおもねりへつらひ、賢臣けんしんを妬ねたみ、己おのれにしたがふものを用もちひ、左衛門さゑもんが好所よきところにしたがひしゆへ、甚用はなはだもちひられ、其上そのうへおきつと内々ないくにて通つうじければ、互たがひに能事よきことをのみいひなし、己おのれがほしいまゝに行いひけるに、



猿兵衛を甚にくみ、いかにもして彼を罪におとさんと思ひ、一つの謀を案じおきつ病にふす、左衛門おどろきさまぐに慰けれ共、熱病と見えて大にくるしむ、ある時猿兵衛病を見廻、其床に近付、おきつ申けるは、熱は寒を用ゆと聞、御邊にたのみたきことあり、こなたの庭に柿の木あり、大方落盡して高き梢に少し残れり、某是を好といえども、取事あたはず、御邊是を取て某にあたへ、病を治せよと申す、猿兵衛心腹立けれ共、又否と申さば害あらんと、心安き事なりと、小庭の方へ飛おり、高き梢にのぼり付、彼柿をおきつにあたへければ、大に悦び之を喰、其夜やまい彌以の外なれば、左衛門あはていかけて期く苦しむやといふ、猫次郎申けるは、先ほど猿兵衛爰に來り、熱には寒を用ゆと申て、柿を二ツ三ツ無理に

婦人にあたへしかば、忽腹いたみ其くるしみ、見るに忍びすと申ければ、左衛門大にいかり、彼が猿智慧殊更重き職に有ながら、輕々しきふるまひ、彼是以て甚心外なり迎、近習に下知して馬行衛尉と、一所に獄屋へ押こめける、今は恐べきものもなく、猫次郎大に悦び、万事ほしいまなれば、手下の面々は各恨をふくみ、大にこそは亂ける。

猿猴律師鹿左衛門を救ふ

爰に又狐宇賀次郎は、しばらく人間の腹をかりて、露命をたすかるといえ共、彼人間醫療さまぐと盡し、殊に神社佛閣へ祈りをかけし故、身中堪がたく成て、しばらくもといまりがたし、是によつて



終に落ちて、鞍馬山僧正が谷に至りける、時に犬守門申けるは、某も人の軒にさまよひ、漸今日を送けるが、此間承候へば、はや丹州若州の兵を引て、某が同類は申に及ばず、御家門其外馳來よし申ければ、將軍憂給ふな、爰において皆ちりくになりたる大將共、牛、羊、狸、鼠、思ひくにはせ來り、新に堅城を築、兵糧を庫藏につむ、時に土龍一平は敵軍に忍び入、おきつに謀を教て歸りければ、良謀既になれりと、其風聞を探りけり、爰に月の輪の禪定岩熊は、今に歸り來る事なし、いかなる故やらんと申所へ、當番の兵はせ來り、只今誰ともしらす此一通の書翰を投入て歸りぬと申す、各是をあやしみ披見るに、禪定岩熊老衰して、世を勤がたく御暇を給へ、いかなる深山にも身をかくし、世をたのしみ度、尤御直に

願申べき事なれ共、大王ゆるし給はじ、我此故に斯のごとし、多罪くと書たりける、各おどろきさわげ共、是非に及ばず、是は岩熊狐王に邪意有を見て、難をさけんために退きし物なり、是によつて狐王は心中に耻辱をおもひ、晝夜勢をぞ集ける、時に鹿左衛門は大に内亂れて、賢臣はかくれ佞臣は威をふるひける故、各心散亂せり、時に狐王は諸方の救を集むる事數萬なれば、今は會稽の耻を雪んと、大將先陣を貉大膳惡平とし、二軍牛九郎左衛門、中軍みづから鼠荒次郎柵探を後衛とし、後軍羊十干狸入道いづれも荒手を引て、土龍犬等に城を守らせ、一軍は二の瀬幡枝の方より、大和大路にかゝり、一軍は竹田の方に出、我みづから花山へ出、敵の後をせめん、後軍は今熊方廣寺に屯し、味方のかけひきせよと、分々と手



分をぞ定ける、されば鹿左衛門は、かくとも知らず、日夜深室に入  
て政を聞ず、時に門兵あはたしく馳來り、狐王は大軍を四手五  
手にわかれて、諸方の荒手をあつめて、只今此所へせめ來ると報ず、  
左衛門聞てしかる時はいかせん、猫次郎申けるは、大王恐れたま  
ふ事なかれ、是虚説ならん、狐王は身を入べき地もなし、なんぞ今  
爰に來て戦かふの利あらんや、汝等大王をおどろかしむる事なけれ  
と、大に呵ければ、是によつて左衛門又心を安め、只汝こそ某が左  
右の手のごとくなれといつて、更に用意もせざりける、かゝる所へ  
四方八面鯨波聲ひきき、後より狐王みづから責入、はや殿中上を下  
へと騷立所に、又牛九郎左衛門大軍を引て、面より横さまにせめ  
入、何かは以てたまるべき、内にふせぐの勢なく、外にたすけの兵

なく、あはてふためき取ものもとりあへず、命をたすかるを幸に、  
笠置の城へとはしり行、左衛門は漸墨染の邊まで來りしが、狸入道  
後陣より早先へ迫り、左衛門首をわたせとのゝしる、左衛門は只一  
疋、今ぞ命のつきたりけると、角を振て大に戦かふ所に、はや大軍  
前後に迫り、百重千重に圍れ、息をもせず責立ける、然所に後陣の  
方、さつとわかれて散亂す、是いかなる故ぞと見る所に、猿兵衛馬  
行衛尉なり、是は左衛門大に破るゝといふ事を聞て、坂本山王猿猴  
律師月取救に來て、先猿兵衛馬行衛尉を獄屋よりたすけ出したる  
なり、是によつて左衛門辛命をたすかり、三疋一所になつて命をす  
て、戦へども、猛勢十重にかさなる中なれば、いかいすべき様もな  
く、あきれはてゝ居たる所に、又敵の一陣大にはせ來る、今は叶は



じ、此大軍の其上に、あれ見よ又馳くは、る一手の勢、我汝等が諫  
 を用ひず、今此困に逢ふ、何の面目有て汝等に對面せんと、みつ  
 から角を以て、既に死せんとし給へば、兩將急ぎ押といめ、先非は  
 悔てもかへらず、勝負は兵家の常なれば、先此所さへ切ぬけ候は、  
 後日に此恨を報せんと、彼馳來る大軍近寄ほど、敵にはあらで猿猴  
 律師なり、三疋ともふたゝび生たる心地して、終に一方を切ぬけ、  
 笠置の城へ馳て行、爰において大軍長追なせそとて、皆勝に乗て悦  
 びいさみ、稻荷の本城へ入れれば、昔に百倍したる結構いふばかり  
 なし、爰に牛九郎左衛門進み出、狐王に諫て曰、前車の覆をみて、  
 後車の誠とす、鹿左衛門は酒食にはこり、賢を退け佞を愛す、今彼  
 賢臣を退ずんば、なんぞ今日の功を得んや、某が申所を用ひ給は

ん御心ざしならば、能是を聞たまへ、左なくば某も禪定岩熊のごと  
 く御暇を下さるべし、先結構古今に過たり、金の襖は壁となし、玉  
 にまきたる柱は玉を削り、金銀の飾は鐵銅として、萬十分を三四  
 分になして、賢を愛し、佞を退け給へと諫ければ、狐王は是を聞て、  
 辛難を経し上の事なれば、是を聞入萬事政を專にす、かゝる所へ  
 番の兵馳來り、後宮のおきつ美君、誰が仕業ともしれず切殺し候  
 と申、狐王是を聞て、天を仰で大に歎き倒伏、近習たすけ起して漸眼  
 を開き、此ころ頻に我妾を慕事久し、ひそかに文玉章の和語も、今  
 は甲斐なくなりたるかと、歎きかなしみ、殊さら亂軍の中、誰を敵  
 とする者なしと、是を憂て終に病を生じ床にふす、餘おもひに堪が  
 たさに、神子をよび寄て、梓にかけて口をよせんと近習に云付、汝



等是を聞て彼が申通り、我に告よと申す、爰によつて急ぎ神子を呼よせ、是を梓にかくるに、妾はからずも敵に奪れて、左衛門につかはれ、面白からぬ月花を涙にながめ暮しける、又春雨の折ふしは、いと心もたへぐに、雁は北へと行ものを、浦山しくも聲聞て、猶しも君の御粧、御なつかしさのあまりには、彼左衛門をたばかりて、君の御輿のいちはやき、にぎはしさもみつらん、おもひもよらぬ露の身を、只恨しきは牛九郎左衛門、妾に何の罪ありて、我胸いたをおそろしき、劍にとがれる角をふり、只一さしに突殺され、何をいふまもあらばこそ、國家のためといはれしが、耳に残りしばかりにて、露の葉草に消にけりと、梓は忽充にけり、近習其由を聞て、扱は牛九郎左衛門が忠心のために、此美君を殺せりと、彼范

蠡が越王の爲に、妾を殺せし例もあり、此よしを明白に申上てはよろしからずと、彼忠心に感じり、たゞ亂軍の中に、敵にころされ侍りしと、いつはりて申ければ、狐王はいよくなげきかなしみて、其日も既にくれにけり。

猿兵衛一賢を進む

爰に鹿左衛門は漸走て、笠置の城に籠る時に、此度の亂を引出せるは、猫次郎が讒佞によつてなり、先是を切て、諸軍をしめしたまへとす、むれば、鹿左衛門も夢のさめたる心ちして、彼猫次郎を召といひども見えす、あるもの、曰、猫次郎は後に罪せられん事を恐れて、軍中より行方なく逃さりぬと申、是によつて左衛門大にいか



り、にくき奴が振舞かなとて、追手をかけよと申ければ、猿猴律師  
 しばし〜と押といめ、夫こそ御心安かれ、某亂軍の中に、奴がい  
 づくへか遊行と、近侍に尋ね候へば、君の罪を請ん事を恐れ、にげ  
 行と申、是によつて某追かけとらへ來り、某が館におしこめ置ぬと  
 申す、それこそ手柄なり、いそぎ召といふ間もなく、猫次郎をしば  
 り席になをす、左衛門大にいかりのしり、此後我を諫賢をすゝめ  
 ざるものは斯のごとし、若又某各のいさめを聞ずんばこのごとく  
 にはからへ、恨む事さらになしと、誓て諸軍に示し、猫次郎を切て  
 獄門に晒しける、故に大に内治り、日夜會稽の軍評定したりけり、  
 是に依て猿兵衛申けるは、某ひとりの賢をすゝめ奉らん、是より東  
 にあたつて、田山といふ所あり、此所に多く賢明のもの集る、中に

は猪薄睡といふものあり、智は宇宙を呑、謀計は鬼神をはかり、勇  
 は山を穿、此もの晝夜の隔なく只眠る、常に業をやめて唯能眠る、  
 其妻是をうれい、様々諫れども聞かず、只果報は寐て待と、安閑とし  
 て眠、是によつて某妻あいををつかし、悪口して終に縁を切、然と  
 いへども猶ねむる事絶す、爰におゐて各是を臥猪先生と呼、將軍是  
 に師の禮を以て、太公諸葛を迎たるに習ひ、はやく是を軍師とし給  
 へとす、めければ汝よくこそ申たれ、我常はこの先生をおもふ事久  
 し、殆是をわすれたりと、大に悦び、急に近習のものを引て、田山  
 へ出られける、時しも夏の末つかた、秋風も身にひややかに、天河  
 あざやかに横り、孤月西山のいたゞきにかたぶき、群鳥双樹のえだ  
 に宿す、暫有て遠寺の鐘を聞、艸葉露をわかつ、寂寞しき道すがら、



両邊山高くして塵俗をはなれ、流に沿ふて行給ふに、いかさま大  
 獸の住家なれと、浦山しくも見たまふ所に、是先生の庵と覺て、  
 萩、萩、すゝき、桔梗、かるかや、女郎花大に茂生りたる所に、先生と  
 覺しくて、形よの常に變り、煤竹色の衣を着し、面は鯨の如く、牙  
 は弓の如く、鼻は朱の如し、いと悠々として睡居たる姿、ぞつとす  
 るほど恐しく、左衛門大に悦び、其後にたゝすみ、夢の覺るまでと  
 まち給ふ事二時計、先生は更に身うごきもせず、よく寢入る事又二  
 時ばかりなり、左衛門は兩足木のごとくに立すくばり、全身しびれ  
 けるが、一時ばかり岩を居たるごとくにて立給ふ、先生は漸眼をひ  
 らき、我後に立たまふはいかなる御方にて候ぞ、左衛門大に悦び、  
 某は相樂郡笠置の城主、鹿左衛門三笠にて候と申されければ、先

生むつくとおきあがり、平伏すれば左衛門いそぎたすけおこし、某  
 仙溪を汚し、來て先生に見る事私の事にあらず、今山野兵亂とな  
 りて各苦しむ、某不才にして是を救ふの智なく、謀なくおさむべき  
 事あたはず、先生は博識の大才を懷て深艸にふす、おしむべしく  
 上は麒麟王をたすけ、下は諸獸の困みを救ひ給は、我死すとも大  
 恩をわすれじ、某不才なりといへ共、先生にしたがひ仰で師とせん、  
 先生是を辭する事なく許諾し給へ、先生の曰、某不才にして何の用  
 にも用ひがたし、猶また外に大才の師あらん、其師こそは迎ひ給へ  
 と申ければ、左衛門涙をながしたまひ、先生某を捨給ふ、我いか  
 いせんと、哀傷の笛の音のごとくなる聲を立鳴給ふ、是によつて先  
 生許諾止事を得ず、君臣の約をなす、左衛門悦事かぎりなく、是



より直に同道せんといひ給へども、いや／＼將軍は先歸りたまへ、某は明日ゆかんと申、我また諸友にわかれをなして、此所を預け、心をゆる／＼としてゆかんと申ければ、左衛門悦びにたへず、然らば臨光明日とたがひに約して、みちすがら一町ばかりも是を送り、たがひに別て暮にけり。

臥猪先生秋艸の床を出つ

爰におゐて臥猪先生は、諸友にわかれ、庵を預て、ともに名残を惜み立出ける、凡半道ばかりも來る所に、急度思ひ出し、此道には盜賊の大將、狼勇藏、同勇眼とて、兄弟の荒ものあり月の中上十五日は近在、下十五日は此所にありときく、けふは十六日なれば、慥

に此所にて、我を害すべしとおもひ、一ツの謀を案じ、大に息をはつて山を穿、人間ならば五十人を入つべし、忽穴深して底には水を生ず、此穴の上を材木を加へならべて、木の葉をしき更に穴ありとは見えざりける、案のごとく狼勇藏兄弟兵法勇力及ものなく、眼は百鍊鏡のごとく、いかれる聲は雷のごとく、汝爰に來る、定て旅用あらんそれをわたせ、去ながら此所に其害を知て來る事おこがまし、汝は才智世に秀たりと聞、若適我に勝事を得ば、我汝が臣とならん、若又我汝に勝事を得ば、我又汝を臣とせんと申ければ、猪はいしくも申たり、必約を違事なかれと、互に誓てしばらくいどみ戦ふ、臥猪の合手に狼の五百や三百、敵するに足すといえども、わざと打負て逃走、盜賊勝に乗て追かけ來る所に、おもひもよらずこ



とくと落とし穴に落入、四五百の兵大將と共に踏んだり蹴たり、昨のごとくに成て、上を下へと返し、みづから死する者數をしらす、殊に水次第にわき出けれども、各水を得たれば皆這上るを、臥猪一と息吹は彼積あげたる土残らず穴に埋む、是によつて狼兄弟聲をあげ、先生我をたすけ給へ、向後先生の命に隨ひ、命を捨て忠を致さんと申ければ、汝是を忘るゝ事なかれと、猪は牙を以て穴へ差出しければ、各其牙に取付事、兩方に二十疋計、取付て是をはね上り、残らず地上に出て畏る、是によつて盜賊詞を揃へ、先生我等が命をたすけ給ふ上は、命に背かじと降参しければ臥猪は是を憐み、某は今笠置の城主につかへて、只今此道を通るなり、汝等も召つれゆかんも某心よからず、しかし汝等に一つの功を立てすべし、

來る冬のはじめ、葛野郡の西に當て牛ヶ瀬といふ所あり、其少し北に千代原といふて夫を少しゆけば、下山田といふ所に、淨住寺といふ所有、是則西山の裾也、此の山上に汝等此勢を引卒して、堅此所にまつべし、麓に鹿といふ文字の旗をさし上、大軍戦は、汝等其旗を目印に其大將を救へ、其日は必戀塚の東に火の手揚べし、夫を合圖に相待べしと申ければ、兩將ともに是を承届て、二町餘も道を送り、名残おしげにわかれる、時に光陰矢のごとし、鹿左衛門は臥猪先生を得てより食をともに同じうす、去ながら寝る事ばかりは中々同じうすることあたはず、午日謀を聞て曰、先生いかいして狐王に敵し給ふ、將軍憂給ふ事なかれ、併此度は戦ひよろしからず、某夜天文を見るに大白星宇治の郡愛宕の郡の間に照して、



七星相樂の城に向ふ、是味方に利なくして敵に利あり來春の暖になる時をまちて戦ふべしと申せば、左衛門是を聞ず、其故は臥猪先生の謀略を試る爲なり、是によつて臥猪は其心を察して強てといめず、然らば先將軍は檜島に御陣を召れ、先手は六地藏より廿八町北に山あり、麓は深草此所に猿兵衛を遣し、後陣は乙訓郡小畑川に屯し、馬行衛尉をつかはし將軍は大將三員を引て、後には上鳥羽に陣を移したまへ、此度の戦ひに味方利なしといへども、一員の大將を得ん、某も御陣に御供仕べしと、諸將を集め、手分をぞしたりける。

狸入道法眼謀馬行衛尉を困む

爰に狐王は牛九郎左衛門が謀を聞て、内外大に治りける、然る時

に犬守門が手下の者馳來り、鹿左衛門は田山の臥猪先生を軍師として、三手四手にわかれて責來ると申す、是によつて狐王は諸將に議して曰、我臥猪先生は大才智謀のものとな聞及びしに、中く取に足らぬ合手なり、某夜天文を見るに大白星宇治の郡、愛宕の郡の間に照して、七星相樂の郡の城に向ふ、是味方に利有て敵に利なし、是味方に願の時也とし、先貉大膳を先陣として御幸の宮に屯し、一手は狸入道大藪に陣し、狐王は病氣漸快くなりければ、みづから中軍に備て、後陣は羊十干城南寺に屯し、牛九郎左衛門其外一騎當千の大將に城を守らせ、此度は臥猪先生を捕へしといさみすゝみければ、諸將は臥猪先生を恐れいかにせんと思ひし所に、狐王は利を説て申きかせしゆへ、大に悦びいさむ所に鼠荒次郎申けるは、某夜天



文を見るに敵に利なく味方に利あり是大王の察し給ふ所也、併此度は一員の大將を誤らん、是肝要とする所なり、萬卒は得安く一將は得がたし、只此たびは味方堅守て、出て戦事なかれと申す、狐王は大にいかり、汝何とてかゝる不吉の詞を出や、今臥猪先生みづから來らん、我是と戦かはすして堅く城を守りなば、某を臆病ものと嗤ひ艸にならん、汝おそろしくは城に残れ、我決して出で戦はんと申す、鼠荒次郎は王の諫を用ひぬを見て嘆て曰、狐王我邪慾にはこり、千歳の白狐其術をわすれ、遠く一事もさつし知事あたはず、適天文をみるといえども、大將を失ふ凶をしらず、却て某が術に劣れりとぞ申ける、是によつて各手分をしてぞ打立ける、時に先陣貉大膳御幸宮へ打立所に、はや敵の大將猿兵衛陣を深草に取、貉大膳大

にいかり、汝等舊日の耻をしらず、爰に來る我今日猿の首を取て、壬生寺へつかはさんと、いはせも果す猿の兵衛、大にいかり互に戦かふ所に、猿兵衛俄に胸痛み戦かふ事あたはず、是は猿兵衛霍亂を煩ひ、いまだ平癒せざれども猛氣にはやり此度の軍にも出たるなり、爰におゐて味方大にみだれ立て、敵勝に乗て追かけける、時に馬兵衛尉は小幡川に陣をとらんとする所に、狸入道はや大藪に陣を取り、狐王は兼て一卷の謀を、狸入道に授置ける故、彼狸入道急に陣を引かへ、手下のものに叫教ける、かくとは知す、馬行衛尉は、たぬき坊主を目かけ、汝迷を取て賊に組す、何を先非を悔て降ざると、みづから一鞭打て敵の陣に馳入、右往左往に蹴立たりしが、狸入道は時分よしと、腹つゝみを打か見えしが、忽四方真黒になつて、



宛も八陣に迷ふがごとく、彼かこみを出んと、右に突左りに突ても出る事あたはず、互に迷ふて死するものかすをしらず、一疋も残らず討れける、されども馬行衛尉は、漸一方を切ぬけ、小幡川にげ走る、此川の廣き事、五拾間常に水なし折節雨天の後なれば、水満満として大波天にかゝる、行衛尉は心に念じ、唐土の的驢檀溪を渡りし事もあるものをと、踊上つて一飛に向ふの岸へぞ飛越ける、此所にしばらく息をやすめ、敵の陣は何といふ陣にてやあるとおもひける所に、漸是を案じ出しけるに、狸入道が手下數千疋、各陰囊をひろげ我を彼陰囊にて包しものなりと、初ておもひあたりける、去ほどに鹿左衛門は上鳥羽の陣を取所に、羊十干城南寺より是を攻、時に狐王、謀を羊にさづく、是に依て羊十干大に聲を上、鹿左衛

門が出たる後へ廻り、笠置の城を攻取、左衛門が一ぞく共今此陣中に捕置たりとて、大によばはらせ鹿笛を各吹立ける、左衛門大におどろき是正しく我一ぞく共の聲也、天を仰で大にかなしむ時に、狐王は後に近づき、左衛門首をわたせと呼はる、味方大に心散亂して、膽を冷し魂を落してみだれ立ける、前後に敵をはさみたれば、右往左往になつて死するもの數をしらず、漸一方を切ぬけ左衛門只一疋こてにげ走り、岡村まで来る所に、又檜原村の方より貉大膳此所へまいり、一軍を率て取まきける、左衛門氣も魂も身につかず、味方の大將はおひくに敵に圍れ、左衛門をすくふ者なく大に歎て曰、我諸將のいさめを用ひず、今日此所にて死せんとはと、涙を流し居給ふ所に、東を見給へば、火焰天を焦し、家棟數千軒を焼がこ



とし、是則臥猪先生猪狸など、戦かふなり、かくとはしらす左衛門は、今は危く見えける所に、敵の西よりさつとひらき馳來るを見れば、身には銅色の鎧を着し、聲は釣鐘のごとく、眼は日月のごとく、口の廣き事耳に及び、大將と覺しき一つの首を口にくはへ、左衛門に申けるは、某は狼勇藏と申もの、某臥猪先生の教によつて、此所に相まち君をたすけ奉る也と申す、又東の方よりどつと崩れて一員の大將是も栗皮色の鎧を着し、聲は雷のごとく眼は大盤氷のごとく、敵の大將と覺しき一ツの首を肩に引かけ、左衛門が前に畏り、某は狼勇眼と申者、則是成勇藏が弟にて、臥猪先生の命によつて、茲に來り君をたすけ奉ると申す、是によつて左衛門は蘇生したる心地にて大に悦び、各一手に成て古川より宇治江をさして走りけ

る、敵は大に討かち彼火の手あがる所は、いかなる大將やらんと、東をさして引返す、時に臥猪先生は、敵大勢にて取巻しといえ共、一疋も寄つかず只取圍たる計にて、焼艸を積で火をかけて、十重千重に取巻けるが、先生は少しも騒がず只よく寝入たるなり、時に狐王大にいかり、汝等何とて臆病なる、此先生は只能寝入たり、和泉式部が詠にも、  
 『かるもかく臥猪の床も寝を休み、さこそねをめれかゝらすもかな』  
 とよめり萬嶽崩るゝとも、目をさます事もあるまじ、いざや臥猪の床の油断を見付、一息に責殺せとおめささげんでかゝりければ、臥猪はよく寝入たる形をなして時分はよしとむつくと起て、いかれる聲勇をふるへば、毛は針のごとし、一と息吹ば二三千皆吹ちらされ



て死にけり、中にも狸入道は、大木一本小楯に取、枝に取付捕んと  
 うかいひ居けるが、二三度も臥猪往來しけれ共、さらに捕る心地な  
 く、腰足ふるいわななく所へ、又臥猪は狸を目がけ來りけるが、狸  
 はおもはず取付たる木の枝より、臥猪が背中へ落にける、臥猪は是  
 をひらりと請て、横になげて口にくはへ、生捕にしてしづくくと本  
 陣さして歸りける、羊は是を見て、きたなし返せくといひければ、  
 狐王は魂も身につかず、羊を呵て曰、彼がにぐるを幸に、呼返す事  
 なかれといふほどこそ、皆一同におそれをなし、本陣さしてぞ歸へ  
 りける。

鹿左衛門再奇謀をはかる

爰におゐて鹿左衛門は、敗軍を率て笠置に歸り、我先生の教を用ひ  
 ず、今日の敗をとれり、殊更手おひ死するもの數をしらず、先生我  
 を罪する事をゆるし給へ、勝負は兵家の常なり、君是を憂たまふ事  
 なかれ、併我狐王の軍を見るに、英雄の大將あまたあり、某一の  
 謀あり、此度は狐王を困べしと、先諸將をあつめ某狸入道を捕  
 たり、諸將大に悦び、先生誠に勇も秀たりと即ち狸入道を引出し、  
 汝陰囊の謀を用ひ、馬行衛尉をくるしむ、汝又今爰にとらへられ  
 たり、何ぞ降らざるぞ、敗軍の將命をたすけ給は、誓て大王に降ら  
 んといふ、是に依て其繩を解しめ、猿兵衛が手下に預け置、時に猿  
 兄弟をおもく用ひ、其外其功を顯しける、さて又猿兵衛は霍亂を煩  
 ひ、いまだ全快せざるに、此度の戦かひに出、大に胸いたむと聞ぬ、



汝能養生せよ、先生の曰、猿の霍亂は心安し、其療治を教ん、夫霍亂といふものは、揮霍變じて内積所あり、外傷る所あり、よつて陽昇らず陰くだらず、故に心腹卒痛してさまざまの害をなす、霍亂には陰凌泉又は承山に針す、腹中痛には委中に針す、胸もたへ吐せば幽門に針す、吐瀉には三里又は關中に針す、汝は幽門に針せよ、かならず平癒せんと、みづから脇腹の毛を一筋ぬいて、是をあたへ、此毛を石にてたたく時は、たちまちいかつて針のこごとくに成、汝是を幽門に立よと申ければ、猿兵衛恩を謝して悦びける、扱又汝が方に狸入道をつれ行、かやうくと叫謀を教て、必ず違ふ事なからしむ、次に驥小貳を呼、汝某が申付たるものを集來れるか、さん候某が手下のもの共、所々の人家に入、悉く奪取、則是へ持

参いたせしと差出すを見れば、至極古き草足袋也、左衛門を始其故をしらす、是いかなる事に候やと尋ければ、先生嗤て後日にしれ候はんとぞ申ける、則驥小貳に謀を教しへ、次に馬行衛尉を呼、汝は五千疋を率て、敵の後より空虚なる所を責よ、次に兎浪江之丞を呼で、汝は三千を引て上加茂に埋伏し、敵のにぐるを追へし、次に栗鼠一學をよんで、汝は五百を率て蔓珠峙にまゐふくし、敵の兵糧武具を拾ひとれ、君は一萬を率て、竹田九條鴨川を仕切て、敵を西へ出す事なかれ、又狼兄弟は先陣として、無二無三に攻かゝれと、手分を定め、臥猪みづから本城にとまり、おもひくくに用意をぞしたりけり、爰に猿兵衛は、狸入道を客屋に饗應けるが、狸入道は只古郷へ歸りたくおもひくらしけれ共、いかゞすべき手便もな



く、おもひくらす計也、折節猿兵衛と密に物がたりす、彼狸入道はあやしみ、寝入たる顔にて一間に耳をすまして聞ければ、兩將のはなし或は高く、或はひく、其中にも此度我君軍に利なきをかなしみ、先生のおしへによつて、春日大明神へ祈願をなし給ふ所に、ふしぎなる靈夢を蒙りたまふ、其告に曰、汝軍に勝悪事災難を逃れ、運を守り、百度戦かふて、百度勝事を得させん、此宇治の郡小栗栖に勝福院といふ寺あり、此寺號は勝福とよめり、此所に三尺四方の小宮有べし、神體は庚申なり、此宮をひろひ、城の内へ入密談の間に指置、かならず此戸扉をひらく事なかれ、開けば必死するなり、夫ゆる表に錠なく内に錠あつて、秒中の秘佛なり、朝暮不淨をのぞき、是を祈るときは、彼神託うたがひなしと夢見給ふ、是

によつて某は今宵彼所にゆき、右の小宮を拾ひ來るべし、御邊は其間此所をあづけまいらす、かならず狸入道にしらしむる事なかれと咄ける、此所を狸入道たぬき寝入によく聞届け、猿兵衛がゆかぬさきにとひそかに夜にまぎれ、城の内を忍び出、勝福院さしてぞにげはしる。

騷小貳謀て鞍馬山の城を奪ふ

爰におゐて狐王は、大に打勝といへども、大將二疋を損じ、狸入道は敵に降参す、是によつて諸將に議して曰、某稻荷明神の神使にて、鍛冶の宗匠たり、此度は眞劍をもつて戦かはんと、大に櫓を築き、一七日もの忌して、槍刀等夥敷拵たり、其財資を費事、二



度する事あたはず、時に狸入道は敵をたばかり、此所へ立歸りぬと申す、急ぎ呼出しければ、一つの小宮を持來り、汝爰に立歸るは若敵の謀にやあらん、是を白狀して其うたがひを晴さしめよ、某は敵にとらはれたりといへども、魄は味方にあり、ある夜某が客屋に故郷を思ふて、燈をかゝぐるをりから、敵の大將猿兵衛と猿猴と申けるは、某が聞共しらす、呷けるは、かやうくしかじかの事共まで、くはしく是を狐王にはなしす、狐王大に悦び、汝能こそ持來れりと、身をさよめ彼小宮を密談の間に飾置、心よくこそ評定したりける、又狸入道は一つの謀を案じ、某敵にとらへられたる中に、猿兵衛馬行衛尉が、手跡を能似せ覺へ候、某反間の謀をなさんと、二通の書翰を認め、犬守門にもたせて、笠置の城中に落しける、

扱又猪大膳を先陣として、狸入道の後陣とし、鼠土龍羊牛とともに大軍を集めて待かけたり、時に敵の先陣狼は、はや猛氣にはやつて味方の先陣、猪大膳におめあてかゝる、互に問答をする間もなく、はやさんへに成て責合ける時に、稻荷山のもの共馳來り、狐王に申けるは、彼庚申の小宮己と戸びら開けて誰しるものもなく、打倒其中には馬の杓柿の皮などこれあると申す、狐王大にあやしむ所に、又陣前より報じて申けるは、敵の大將猿兵衛馬行衛尉味方に降て、君に仕んとて來りけるよし申ける、狐王大に悦び、狸と目を目にてうなづさ合、兩將を呼入、對面して曰、汝等は何とて爰に來りて、我に降るや、兩將の曰、某等は何の罪なきに、臥猪先生ほしるまゝに申けるは汝等は敵に内通し、味方を亂、後日に首を刎とい



かりける、鹿左衛門臥猪先生を頼んで安に大將を害す、是によつて  
 大王に降を願ふと、涙を流し申ける時に、狸入道羊十千諸友に反  
 間の謀にあたりと思ひければ、狐王は目くばせして、終に是を  
 幕下に用ゆ、時に庚申の小宮己と開けたる事、大にあやしみ幸汝  
 等我に降参す、いかなる故ぞ、扱又小宮の事を我にきかせよ、兩將  
 申けるは、大王は能ものを察し給はず、是なる狸入道は、謀叛の志  
 あり、却て左衛門が方へ内通仕ぬと申す、狐王は大におどろき是  
 いかなる故ぞ、兩將口をそろへて申けるは、臥猪先生と狸入道とひ  
 そかにはかり、彼小宮の中には、騾の小貳と申者を入置て、大王  
 の謀を聴てにげ歸れるものなり、是狸入道の工事全明白なり、又  
 大王は反間の謀にて某等を味方になし王ふ事も、騾くはしく臥猪

先生に告るといへども、臥猪は甚うたがひ深く、たとへ我々命をた  
 すくるとも終にはうたがはれ、其難に逢ん事必せり、これによつて  
 大王に降る、鳥懷に入るときは狩人も是をとらずといへりと、涙な  
 がらに申ける、狸入道の反間の謀は、大王の心をゆるめんためな  
 りと申ければ、狐王は大にいかり、狸入道をせめて曰、汝なにとて  
 害をなす、先味方の血祭りと、一七日もの忌してきたいにかたいし  
 刀をもつて、終に引出して切しむ、狐王其首を見て始めてさとり、大  
 に後悔し、我敵をはからんとし却て敵にはかられたり、悔けれ  
 共態と面へ出さず、彼兩將をよび出すにはや大勢に成て、後より馬  
 行衛尉猿兵衛踊出て、我々は臥猪先生の教によつて、汝が謀に  
 付て是をはかり、今汝が首を取と申せば、狐王うろたへける所を、



猿兵衛は間近く寄、小宮の内に居たりしは驥にはあらず、誠は某なり、今庚申の手に加れと、大におめいてかき付ける、時にはや狼兄弟は敵の先陣を打やぶり、大軍を率て入来る、味方の大將是をふせぐといへ共、内外より責立られ、せひなく西の方へ皆走りければ鹿左衛門みづから下知して、大勢是をさへぎる、是によつて北の一方を切ぬけ、稻荷の本城へ入らんとすれば、はや入替り、是を見れば敵の大將臥猪先生此城を乗取、かねては馬行衛尉来るべきはづなりしが、反間の謀にて、謀を行し故、手分俄にかはりたるや、是によつて敵は前後に度を失ひ、死するもの夥しく、かばねは積で岡をなし、血は流れて鴨川を紅になす適々にぐるものは手を負ひ、中々真剣をつかふ事あたはず、皆ちり／＼に馳たりける。狐王にし

たがふもの四五疋、北を望で馳て行、上加茂迄来り息を休めけるに、狐王大に笑て曰、世皆臥猪先生を智謀有と申せども、取るにたらず、某ならば此所に伏勢を置んと申事、いまだ終らざるに、忽ち兔浪江、大軍を率て一度におどり出で、ひさしく爰に汝をまつとて、大に戦ひ爰をせんとふせぎける、漸切ぬけて、蔓珠峠に至りしばらく息をつぐ所に、狐王又大に笑ふて曰、某ならば此所に伏勢をおかば、一疋も生て歸らじといふ事いまだ終ざるに、又四方八面に鯨波一度にどつとあげ、おめき出て某は栗鼠一學なり、久しく爰に汝をまつ首を置いてげゆけと、又大に戦かふ事半時ばかり、今は心もちからもつかれ果て、戦を好まず、只にぐるを幸に馳たりける、漸貴船迄にげ延、狐王又大に笑ふ、諸將申けるは、大王笑ひたまふ事



なかれ、笑ひ給ふごとくに敵の伏勢を引出し給へりといふ、耳もとに  
 どつとおめりて出たるは、粘伊織なり大に戦ひ皆討とめよと下知し  
 てはせ迫る、時に味方は小勢なりといえども、古老手練のもの共な  
 れは、又此所も切ぬけて、鞍馬山の城に入んとすれば、敵の大將入  
 かはり、驒小貳也、狐王大におどろき引返す、時に此所は鼠小彌  
 太といふもの、狐王の第一頼みとする城なれば、此ものに守らせ置  
 ぬ、然る所に夜前敵の大將、驒の小貳數千疋を引ぐし、某は狐王  
 の命をうけて爰に來て、此城を御邊と一所に守れとの事故馳參ると  
 申す、彼鼠の小彌太は月の影にて、天守より見れば、皆我一族の鼠  
 なれば、誠の味方とおもひ、城に入る、時に各城に入れて其形を見  
 れば皆古き革足袋にて身を包み、形大にして寔はちいさき驒なり、

是に依て鼠小彌太におどろきさわぐ所を取ておさへ、直に捕て殘  
 らずしたがへ、何の苦もなく城を乗取り爰にありしなり、彼狐王を  
 見て是を追討にせよと、城を出けるがはや遠くにげゆきたる故、是  
 非なくみなく引返す、抑此鞍馬山と申すは、王城の三里、北にあ  
 り、大和本紀に曰、此山城シロの字を書て、山城と讀事は、天武天  
 皇大友王子位を争ひ、山城の國を通り給ひし時、大友王子軍兵待か  
 けて射奉りければ、矢御脊中にあたりける、是によつて其所を矢脊  
 の里と號す、然ども又俄に追かけ奉る間、北山のおくに城を抱て籠  
 給ひ、御馬を鞍置ながらつながら、故に、此所を鞍馬と申と云々、  
 崑玉集に鞍馬山は、關山なりと云々、無二集に曰、靈龜二年、くら  
 ま毘沙門出權ある元亨釋書曰、鞍馬寺は太中太夫藤伊勢人の創する



所なり、太夫佛に歸する事尤あつし、常に勝地を得て、道場を建  
 觀音の像を安んと、延曆の間夢に城北の山に往くに、翁有て告て曰  
 此地天下に甲たり、三鈷杵に似て、常に五色の雲を出す、汝練若を  
 營まば利益無量ならん、太夫夢中に問て曰、誰人ぞや翁答て曰、王  
 城の鎮守貴船明神なりと、搔けすごとくにうせ給ふ、爰によつて、  
 夢覺ていまだいづれの所といふ事をしらず、太夫は白馬を飼て、常  
 に是に乗り此馬に鞍を装語て曰、白馬は靈畜なり、汝定て我夢見  
 る所の地を知らんとて、則馬を放てひとり童子をさし添てゆかし  
 む、其馬城北にむかつて去る、時に一山阿に至て茅草の中に駐、童  
 子ふと此事を告、太夫往て其地を見るに、宛夢に見たるごとくな  
 り、爰におもひもよらず茅のうちに毘沙門天の像を得たり、是によ

つて一字を建て、其像を安、故に鞍馬寺と號す、太夫おもへらく我  
 觀音の像を安と欲して、今毘沙門天の像を安、願はくばいまだ心果  
 ず、ある夜又夢を見るに、童子年十五計なり、是則多門天の侍者禪  
 貳童子なり、告て曰、當に知觀音多門天と名は、異ども、一體分身  
 なり、と夢覺てうたがひをとぎ、太夫後日に又一堂をいとなむ、觀  
 自在の像を置、今寺の西觀音院是なり、其後峰延法師爰に居て、益  
 靈應を傳ふといふ、是によつて、驥小貳犬に悦び、使を以て鹿左  
 衛門へ報じける。

狐王敗軍を引て黒峰に走る

爰に於て鹿左衛門は、猪が謀を用ひ、大に討勝ち今は遠近に恐



るゝものなく、相樂郡笠置の城に、一子鹿王丸に守らせ、此群を領す、是に依て諸將に恩賞を施し、鞍馬山へ馬行衛尉を差遣し、驥とともには是を守らせ、此所は愛宕郡なり、扱又其の身は稻荷に枕を高くして心を安じ、扱又の伊織を呼び汝が敵の捨たるを拾ひし品々、残らず取よせよとて大に悦び、第一眞劍の太刀等是を、本阿彌に賣拂ひ、落したる毛は筆屋中へ賣拂、死したるもの、革をはゐで各敷物とし、暖に着てあくまで食ひ、此稻荷は宇治郡なり、鹿左衛門は諸將に向ふて曰、いなりと申此神は素盞烏女なり、母は大山祇神女、大市姫なり、倉稻魂神百穀を播し給ふ神なり、故に稻荷といふ、元明和銅年中始て伊奈利山三ツヶ峰平なる所に顯れ座す、是秦氏祖中家等木をぬき蘇を植なり、秦氏人等禰宜祝として、春秋の祭等

を供仕す、其靈験によつて、臨時の御幣を奉る、延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣時平なり、始て件の三箇の社を修造するものなりと、鹿左衛門つぶさに申されければ、みなく是を祈るに其印なしといふ事なし、こゝに狐王はさんぐに打まけ、西をさして走り行、岩屋より杉村へ出、夫より下村上村より山越に、葛野郡の西黒峰といふ所に、至りて各休息せんと、或は毛をなめ首を振て、谷水を呑て大に息をつぐ、時に夕陽煙霧を催ふし、深山冥々として、嶺上天に聳、水音谷にながれ、かゝる所にひとつの大穴あり、定て是は隠遁して、世を嫌ふの輩ならん、しかし此の所に一夜を明し、明日は丹州の方へゆき、又一族どもを集、ふたゝび軍を出さんと、彼穴の扉を敲ければ、内よりおそろしき童子出て曰、いかなる御方にて候や、



我こそ稻荷山の城主、狐王并に幕下の者共成が、此たびの亂に逢ふて、道に迷ひ爰に至る、何とぞ一夜の宿をかし給へと申ければ、彼もの申けるは某は主人にあらず、我師は他行めされ、今爰に居候はず、御宿はかなひがたく侍る、しかしあるじの歸まで夫に待給へと申す、狐王曰左あらばせひなし、御邊の姓名は何と申すや、某は仁平の頃帝を惱し奉りて、頼政が手にかゝり淀川に捨られし魂魄猶消やらず、爰に迷ふて師を求め、今は善心童子鶴と申すなりと申ければ、皆々顔を見合、おそろしく、身の毛もぞつと立にける、時に大雨しきりに降來り、全身皆ぬれば、是によつて内へ入り候へと申す、されども此あるじは、いかなるおそろしきものなるかと、只あされはてゝぞ居たりける、各客屋に入れば、岩窟水濁青苔

縁深して、こなたの奥の一と間を見れば、一軸の畫像あり、これに香花をそなへ燈あきらかなり狐王鶴に問て曰、是はいかなる畫像にて候や、さん候只今のあるじの父にて候、名は月の輪禪定岩熊と申、此所に世をのがれ住けるが、先月中旬にむなしく死たり、其嫡子熊谷次郎は、此葛野郡愛宕山白雲寺に城を抱、猛勢十万あり、彼熊谷次郎は父の死をかなしみ、其弟を出家させ、熊谷蓮生法師と名をよび、今此庵穴に居給ふ、則某が師とする所なりと申す、狐王大に悦び又は歎て曰、我むかし岩熊が諫を用ひず、終に我を捨て、今其利をうしなふ、思はずも爰に來りて、岩熊が靈像に對面するこそ、面目なけれと涙を流し、香を焼て大に歎く、諸將もともに是を歎き、涙は雨聲に交りけり、かゝる所へ熊谷蓮生法師、立歸りけれ



ば、しかぐの事を聞て大に驚き、將軍爰に來り給ふ、しかし明日は早々に立出給へと申す、狐王は是に禮をなし、貴僧我を憐み一夜の宿を忝し、不思議や貴僧に見、殊に岩熊が靈魂に對面するこそ大幸也、何とぞ昔の縁をおもひ、御舎兄熊谷次郎に此身を頼たしと、涙を流し申ければ、蓮生は是を聞て、某は世外の徒、塵事を語るにいとまなし、將軍左様に思ひ給は、兄に逢て是を語給へ、某は念佛にいとまなしとて、佛前に向ひ經を誦す、是によつてすべきやうなく、夜もすでに明ければ、各恩を謝して熊谷次郎か城へと出にける、時に熊谷次郎穴住は、父の古き城を守り爰に住、抑此愛宕山と申は、諸社根元紀に曰、西に八咫の嶺あり、日の神岩戸を出させ給ふ、其御光りのさし向ふけしき、八咫の鏡に照れたるを、名付て八

咫の峰といふ、後世の人愛宕山といふ、火の神軻遇突智命と申す、是大權現なり、其代は平安城の北、鷹ヶ峰の東隣に坐しを、光仁天皇元年釋の慶俊、今の愛宕の靈地をひらき移し奉るなり、よつて神役に仕奉る、彌宜今に北山の麓に住居して、祭事の日のみ供奉し奉るなり、又此寺を白雲寺と申事は、先王城の西に山あり、愛宕山と名付、昔異國の鬼神本朝に來て、人民を惱す災火止期なし、三鬼王あり曰、天竺の日羅、唐土の善界、日本の太郎坊是三國衆魔の大將なり、文武帝の御宇、大寶元年辛丑役の小角、泰澄兩上人に勅して、彼惡魔を退治せんと、先山城國葛野郡嵯峨の幽谷般若の石屋に籠て、懇精を抽で、靈驗を祈る、愛宕山は常に黒雲變て絶ず、兩上人ともに山頭に登り、黒雲たちまち變じて白雲となる、



よつて白雲寺と號す、泰澄又雲遍上人と名付、其岩窟の中に地藏、龍樹布留那、毘沙門各出現し給ふ、阿字の尊像は甲冑を帶し、勝軍の形を現じ給ふ、神道におゐては伊弉諾伊弉册尊なり、光仁天皇の御宇、天應元年辛酉、慶俊僧都に勅して、此山を中興し、和氣清麿の造る所なり、爰において狐王は、熊谷次郎を頼けるに古しへの主從今なんぞ辭すべきとて、終に此所に有て評議して曰、只鹿左衛門は能將を用ひ、臥猪先生は謀深して、中々敵する事かたし、是によつて唐土の虎將軍に救ひをもとめ給へと、いふ事いまだ終らざるに、某ゆかんといふ是をみれば土龍なり、則是を使として敵に忍びの一大事と、地の下よりぞ馳たりける、

虎王來て狐王を救ふ

爰に鹿左衛門は、稻荷山にて兵を手練し、大に内治り、道に落たるを拾はず、夜穴に番せず、時に猫の一物といふものあり、父の彈正は罪せられ、猶左衛門あわれみて、其子を立る、この猫の一物は去子細有て、左衛門が金子四十八兩預りしが、雨中のつれぐに、己が近き友を集、毎夜賭奕を企つるといへども、かのかるたをもたず、我幸に金子四拾八兩あり、是を四十八枚の金泥入の、上かるたと思ひ、ひと勝負をして樂んと、各車座になりて大にたのしむ、時に左衛門が方より右の金子を持參せよと申來る、是によつて彼かるたをみれば四十八兩の金子、或は碎或は半分に折て、壹兩も用に立が



たし、此よしはや左衛門に告るものありて、彼猫を捕引出し、左衛門大にいかり、汝大切の金子を何とて、箇様になしたるぞとて、是を切らしむ、鹿左衛門後悔し是我誤なり、俗にいふ猫に小判、馬の耳に風と、世のたとえもありけるにと、其跡を憐けり、爰に土龍一平穴行は唐土に至り、大王虎將軍に見、狐王救ひを求るの一輪をさし出し、各同類の恥辱を察し、はやく狐王をすくひ玉へと申す、虎王諸將に下知して是捨置べき事にあらず、急ぎ是を救へしとて、即時に諸將を集けるに、獅子王毛渦、豹王同虎、獾王一角、駝王龍面澤、獸王亂毛、麝香王香袋、虎王みづから二萬の勢を引きうち立ける、

鹿左衛門春稻荷山に遊ぶ

頃は彌生の末つかた、山は霞に笑へる氣色、柳は青く糸ゆふの、雪は消つゝ花の雲、衣ひとへのころなれや、左衛門は諸將をあつめ、春の深山の花見の酒、興を催し舞あそび、所は稻荷外ならぬ、深山の花と題を置、俳諧の發句をこそは吟じけれ、

おそろしき深山も花をちからかな  
 歌人や深山も京のはなこゝろ  
 友ほしき深山の花や丸木橋  
 行春の山なを近しはなの奥  
 へつらはぬ身もや深山のはなの咲

鹿 猪 猿 馬 兎



奥山に歎くは愚痴かはなの晝

はつかねすみ

山深し照日降日もはなの雲

栗鼠

それ鐘の音せぬ山の花の榮

粘

寝て暮す人ぞ深山の花の徳

鮎

雪と雲花なら残れ山の奥

猿猴

各 獸 相應なる句を吟じて、大に酒をくんで遊びけるこそたのし  
けれ、爰に又狐王は、熊谷次郎に身をよせ、其上唐土の虎王救ひに  
來りて、大に悦びに絶ず、熊谷曰、今味方の咽とする所は、鞍馬山  
なりとて、諸將を議して曰、某は鞍馬山の後よりせめて此城を奪  
又大王は是より東比叡山に陣を取玉へ、抑此山と申は平安の帝都は  
天上の名蹟を顯せる國なりと云々、良に當つて日得といふ山あり、

日の神の御光を願へども、其光を得ざる所を、諸神是を祈りて日を  
得べきといふ心にて、日得の山と名づくるなり、管見記に曰、叡山  
の雪誠に都の富士といひつべきものなりとあり、平安城の鬼門に天  
臺山あり、よつて此都をもつて、桓武天皇傳教大師と契約有るによ  
つてしかいふ是峯竟の城地なれば、大王此所に陣をめされと申けれ  
は、虎王の曰、某は此所より責くだらん、扱又是より南山崎の北に、  
城二ヶ所あり、是はいかなる城地にて候哉、是は天王山と號して、  
文明二年山名是豊赤松の一族上洛して、山名天王山の城を築く、是  
によつて島山義就城を西の岡に築き、是を攻圍まんと欲す、是豊ゆ  
へありて備後に歸る、赤松の一族これに代て、對陣する事數月なり、  
又其南に一城あり、是は天正十年十月秀吉是を築く、よつて此所に



二ヶ所の城ありと申す、虎王是を聞て、則豹王、獅子王に命じて、此所に行しめ陣を取る時に虎王申けるは、此度も夜軍すべし、狐王の手下をのく三四百ほどつ、紛て、狐火を焼て味方を白晝のごとくにすべしと、各手分をしてぞ打立ける、爰に鞍馬山の馬、駮は燈によつて眠所に四方よりどつと鯨波を作りて、既に城を取圍み、熊谷次郎爰に來つて汝が首を取るといへば城中大におどろき度を失ひ、我も／＼とはせ迫りけれども暗はくらし、上を下へと返し大に敗、南をさして走り行、爰に獅子王豹王は、稻荷山の南より大にせめ入、城中俄の事にて何事やらんと、あはてふためき逃走るに、又一手の勢西をさへぎり、虎王みづから爰に來て汝等を討つといふ是によつて諸將大におそれ、其上鬼一口のくらすき夜なれば、前後に度

をうしなひ、敵は數萬の箒を焼て、晝よりも猶あかし、彼光りの中を見れば、終にみなれぬさもおそろしき大將、されども急度は見るに、虎王は形猫の如く、大さ牛の如く、黄色のかたち黒き章、鋸の牙、鉤爪、鬚健にして尖、舌大に掌の如く、頂短く、鼻鄭、一身の勇力、前足にたくましくして誠に猛虎のかたちなり、其後には駝王其かたち馬の如く、頭龍の面に似たり、頂長く耳たれて、口大に眼ひかり、脊に肉峰有て鞍の如く、毛色は青く爪は類に異なり、又獾王は熊に似て、象の鼻、犀の眼、牛の尾、虎の足、毛は黄色なり、又麝香王はかたち麝に似て、色赤黒く、又澤獸王は獅子に似て、額にひとつの角を生ず、又一軍出來るは豹王なり、丸き頭、白き面、洞虎に似て、金錢の紋有て尾ながし、また獅子王はかたち虎の如く、



頭犬に尾ながく、鼻大にして面大髯有て毛は青黒し、左衛門は魂を  
 飛ばし、各一同になりて走りける、中々二目と見るものもなく、皆ち  
 りぐに笠置の城へにけ入る、是によつて狐王は大に打勝、虎王  
 は賞して三軍を鎮め、又稻荷山鞍馬山を一手になして、ふたゝび無  
 事の思ひに安堵せり、さつね王は虎王をつれたち、毎日々々諸方へ  
 見物に出けるが、來れるほどの獸ども、尾をたれ首をかたむけ、恐  
 れぬものこそなかりければ、虎王の曰、狐王誠に智勇の將軍なり  
 と申ける、是まことに狐の威にあらず、虎を恐れて諸獸みなにげ走  
 るなり、是を則狐虎の威をかるといふとかや、爰におゐて唐土の  
 諸將は鞍馬山に籠り、狐王はみづから稻荷山をぞ乗取ける。

臥猪先生諸將と諍ひ服す

左衛門は大に不意を討れ、其英氣を蹙き、諸將に議して申けるは、  
 狐王今唐土の虎將軍に救はれ、味方是に當る事あたはずして、是を  
 ふせがん、時に臥猪先生曰、是勇を以て敵すべからず、智を以て是  
 を拒がん、某一ツの謀あり、手を懐にして大將一疋も出さず、只  
 安閑として狐も虎も一舉に蹙申べし、諸將是を聞て或は目を見合、  
 あるひは袖を引、是を笑ひあへり、是によつて臥猪先生曰、此度の  
 謀利有るか無か、我誓紙を書てあたへ、利なき時は誓紙のごとく  
 恥をうけんと申せば、諸將口を揃へて曰、先生は女童の様なる事を  
 いひ給ふ、誓紙を證據にせば、筆や墨のなき時はいかいせん、役に



立ぬ事に、紙を費したまふ事なかれと嘲笑ふ、我々がごときもの、如何に猛勇なりともあたる事叶す、殊更手を懐にして、敵をうたなど、はかた腹いたき事なり、此うへに猶外聞悪き事を引出し給ふべからず、臥猪曰、若又某敵に勝事をせば、汝等いかなる事をする、諸將口を揃へ、首をはね給へ、先生笑て曰、汝等後日に相違せん、諸將の曰、先生うたがひ給は、誓紙を書ん、先生大に笑て曰、汝等さきに某が誓紙書事を笑ひぬ、いま汝等誓紙をかゝんといふ逆も、何の役に立まじといひかへせば、諸將いひこめられければ、左衛門諸將を呵ていはく、汝等先生を欺、何ぞ無禮なる、諸將是を用ひずんば、此劔にて首を刎給へと、みづから帶したる一振の角をあたへければ、先生は恩を謝し、諸將皆平伏す、是によつて臥猪先生

は、手下のもの七八疋を呼で曰、汝等一二疋づゝ所々に別れて、或は小栗栖、深草、或は稻荷山の邊に往て、五條竹田のほとりに至り、田島をあらし人家を損じ、人間をたぶらかすべし、必人間に姿を見せしむる事なかれといふ、爰におゐて稻荷山の近邊、田島を大にあらし、或は人民をたぶらかす、是によつて近邊の百姓共是をいかり、庄屋等示合せて曰、此頃頻に田島を荒す事、全く稻荷山の猪狐ども成るべしいざ各是を狩べしと、大勢を集め、或は竹槍或は鉦太鼓を打ちいなり山を取まき、四方八方より狩立ければ、狐王は大に膽をひやし、是は誠に人間なるぞと、あはて驚き只命をたすかれと、皆ちりなく成て、稻荷山に一疋も残らず逃ちりける、此由を臥猪先生聞て大ひに悦び、或夜ひそかに手勢を引て、稻荷山の城に入時



に、使をもつて此旨を左衛門に報ず、左衛門大に悦び、諸將にむかひて申けるは、汝等さきに先生を笑ひしかども、今又不意に稻荷山の城を、乗取事を得たりと申ければ、諸將も大に感じて、各手わけをして稻荷山の城へ入給ふ、誠に先生の謀いみじくこそは聞へける、

虎王遙に故郷を思ふて歌を聞く

時に虎王諸將に申けるは、我遙々と爰に來りて、此頃頻に故郷をおもふ、汝等も我意に同じかるべしと、故郷を慕の情を述べれば、諸將もおもはず落涙して曰、誠に尊命のごとく、此間承候へば城中に歌をうたふ其歌に曰、

北嶺蒼々旅鴈歸

行軍眺望涙霏々

かくのごとくうたふて大に歎く、誠にいたましき歌なりと、爵情をかたりける所に、狐王は大はらはになりて逃來り、しかくの事にて、人間に責られ何かは以てたまるべき、漸命をのがれ歸りたり、我首落ざるやと首筋を撫て、はや其跡へ臥猪先生來て、城を奪ひとられたりと申す、諸將聞て大に驚ろき、各評議まらくなり、時に牛九郎左衛門熊谷次郎申けるは、吉例にまかせて夜討にすべし、先虎將軍は稻荷山にかゝり、豹王と一手に出、又大王は羊熊谷と一手になり、大宅村よりかゝり、又獅子王、猯王、澤獸王と、一手に成竹田の方より西をさへぎり、又豕王犬守門と一手になり笠置の道をさへぎり、又駝王、麝香王、鼠荒次郎と一手に成てこの道をさへぎ



り、又貉大膳は某と一手になつて味方を救ひ申さん、又土龍一平は敵の城に忍び入、是より穴を掘て五更の頃、敵の城より火を上て合圖すべしと、手分を定め、各用意をぞしたりける、

臥猪先生謀大に壇を築く

此由はや左衛門が方へ聞へしかば、臥猪先生諸將を集議して曰、此度味かた利なくんば、何ぞ敵に勝事を得んとて、晝夜謀をめぐらし、手分をなす所に、一陣の風吹來て、前なる大木を吹折ぬ、諸將大にあやしむ所に、先生是を占て曰、是すでに敵夜討に來る表相なり、味方用意せずんば有べからずと、先猿猴を呼で、汝は敵の陣中に行き高き樹の上より、長きひちを延し各胡椒を振かけ、眼をかきむし

るべし、次に栗鼠を呼で、汝は身に糞糊をまとひ、鼠が來れる陣に向へ、次に鼬を呼、汝は味かたの城の廻りを掘て、若敵地の中より來ば是をさへぎれ、又兎を呼び汝は元海の猩々王に救を求、彌來らはかやうくにせよと謀を教ける、次に猿を呼、汝は村々に捨たる、牛の晒頭をいくらも持來り、扱百姓の簑を奪ひ來り、手下五十疋づつ、各彼簑を着て彼牛の晒頭を七つづつ頭にくくり、狸入道と一所になりて鼓を打、是を一疋の大獸とす、是を二三十疋程拵、扱又黏を呼、汝は竹を切て三尺ほどの筒を拵、汝が得物の火を以て、彼筒の内へ火を入れて、敵の陣に投よ、次に馬をよび、汝は狐王の來る陣に、油揚の食物をいくらも捨て置てたかへ、狼は牡丹の花をいくら共なく、頭にくくり付て獅子王の來る陣に向へ、次に驢を呼、



汝は稻荷山のうしろに伏て敵を横ぎれ、某も虎王の陣にむかふべし、扱また敵は狐火を焼て夜を照すべし、味方も馬の骨を多く集て、手ごとは是を持つべし、此頃暑氣甚しく毎日雷を催、定て其夜雷雨夥しかるべし、是又味方に利ありとて、みづから一つの壇を築き、先生西にむかふて大に祈る、諸將是を見れば、四方に四面の旗を立て、あるひは羽扇、或は紅染の袈裟衣を棹にかけ、汗をながして祈しを、各不審したりける、

春日山稻荷山泰平樂

爰におゐて、其夜敵用意ありとは夢にもしらす、大將土龍一平は地の中を掘て、漸稻荷の城近く忍び入所に、一手の大將大に聲をあげ、

爰に汝を待事久しと、大に突てかゝる、土龍大におどろき、是を見れば、小主水なり、あはてふためきける所を、やにはに土龍をとらへ、盤に入て本陣に送りける、是によつて虎王は、敵の城中より合圖を今やくと待けれども、其事更になかりければ、待かねて敵の陣に突て入、時に狐火を以て晝よりも猶あかし、然所に大雨しきりに降來りければ、味方の軍兵手ごとに持たる馬の骨忽に燃出、味かたも又白晝のごとし、是によつて鹿左衛門踊出、汝異國の虎王、爰に來て、神國を汚すやと大にいかる、虎王も、豹王も無二無三に敵の陣に突て入る、時に敵の陣中より面白く、頭七つありて、毛は簍のごとし、腹の中にて鼓をうち、其大さ十丈許なり、どつとおめゐて馳來る、虎王、豹王も、すはや日本にもかゝる大な獸有ける



ぞと、いふほどこそあれ上を下へと逃走る、時に猿猴は所々にはせ  
 まはつて、高き木の上より手をさし述て、敵の眼をさんぐにかき  
 むしり、胡椒をふりかけゝる、熊谷は大宅村へかゝり、稻荷の後よ  
 りせめかゝらんと、各打て出ければ、敵の真中を横切、久しく  
 爰に汝を待と不意に出合さんぐに戦かふ、又豕王、犬守門は笠置  
 の道をさへぎる所に、虎王敗るゝと聞て爰に至りけるが、終に見な  
 れぬ、面は白く頭は七つありて十丈許の大將に出合、跡をも見ずし  
 てにげ走る、味方大に討れば、駝王と麝香王と一手に成て戦ひ  
 けるが、雨彌つよくして、雷大に響て、山谷鳴わたる、時に麝香  
 王はいかゞしたりけん、腹十文字に切て死たりと申す、鼠荒次郎是  
 をあやしみて來る所に、栗鼠一學に出合、彼敵は各身に糞糊をまき

たれば、鼠は大に是を嫌ふてにげ走る、又麝香王の死たるを能々分  
 別すれば、此獸は己が臍を愛する事甚深し、獵人に逢ふ時はみ  
 づから其臍を爪にてかきやぶり死すといふ事、香氣陰にありとかや、  
 此夜しきりに雷きびしければ、其臍をとられん事をおもひて、みづ  
 から腹切て死たる事こそむざんなれ、是によつて駝王もはしりけれ  
 ども、走る事あたはず、終に亂軍に死す、時に敵の方より數千の鐵  
 砲大に響き、味方死するもの九分におよべり、是は竹の筒に火をこ  
 めし故、其竹の節焼て響く事鐵砲のごとし、時に狐王は敵に出合し  
 が、味方の陣に、油揚の食物大に落ちてありければ、味方は是を拾は  
 んとして大に亂る、時にふしぎなるかな、たちまち大風來て、唐土  
 の獸俄に其身をくるしみ、戦かふ事あたはず、竹田にありて獅子



王急ぎ本道へはせ來らんと、先獺王敵を拂ふて來けるが、彼鴨川の  
 水一同に流れ出、川原忽波雲を浸す、是によつて大におどろき、殘  
 らずながれ死す、されども唐土の大將等、是を渡るといへども、つ  
 るに獺王水中に死す時にさるもの、曰、獺王爰に死する事は、此頃  
 狐王しきりに悪夢を見る、是によつて獺王かの悪夢を食しが、今己  
 が身にむくへりとぞ申ける、時に川上より元海狸々王は、鹿左衛門  
 を救んと、水牛將軍、水馬將軍、臘臍將軍、一角將軍、犀將軍  
 獺將軍等を引つれ、囊砂の謀にて、流るゝもの共を各討とめ  
 ける、爰に獅子王は戦はんとするに、敵は牡丹の花を各頭にいた  
 いきければ、獅子王は此花の散を惜みて戦はず、伊勢の國まで逃  
 びて、漸神樂の神職に身をよせて、此所に老を養ふ、是によつて今

に至り、獅子舞迎伊勢の國より出るとかや、又澤獸王は漸のがれて、  
 北野の天神までにげのび、天神の御前にかしこまり、神使にならん  
 事を願ふ、是によつて今に至るまで駒犬と申は、此澤獸と申獸  
 の事なりき、かくのごとく、大將大にうたれ、其上狸々王と一手  
 になつて戦ひけるほどに、虎王も東をさして馳行けるが、身軀勞れ  
 て走る事あたはず、大に歎て曰、我日本に來て、かゝる恥辱を請、  
 何ぞ故郷へかへるべきぞとて、はらくと涙をながし大に泣にける、  
 則此日は五月廿八日なり、今に至りて虎が涙と申とかや、夫より  
 故郷をはるかに見て、人は死して名をといむ、虎は死して革をとい  
 むといつて、終に相州大磯に死ける、村人は是をあはれみ、見るに忍  
 びず、ひとつの塚を立て、今に虎が石とぞ残りける、時にふしぎや



大軍残らずうたれ、誰が仕事ともしれず、狐王を始其外一類、各皆藤のかづらにしばりつけて、一所にありければ、左衛門をはじめ諸將一度にとつと勝どきをあげにける、時に狐王を引出しければ、向後人を化し、田島をあらすまじきよしを各誓ふて申、是によつて左衛門其繩を解しむ、時に此繩目はたれが仕事ぞやと申せば、狐王の曰、愛宕山の太郎坊と申、先生曰、某さきに西にむかひ祈をかけしは、愛宕山の太郎坊なりと申す、則願成就せば、某誓て僧正坊の神使とならんといのりしなり、是によつて今に至るまで、愛宕山の繪馬は、猪を畫て奉るも此因縁か、扱和談のはじめには、先狐王を稻荷に送りて、字賀の神魂を守護し奉り、扱狸々王に恩を謝して名酒をつくし、其身は南都春日山に歸り、白象王に泰平を祝し、

諸將に領地をわけて恩賞限なく、扱又時の悦びに、泰平の囃子をこそは始ける、其役々の面々は、先笛には鹿左衛門、小鼓は猿兵衛、大鼓は狸入道、太鼓は馬行衛尉、舞は猿猴律師と定られ、さも花やかに舞臺をかざり、貴賤群集の見物皆泰平樂をかなでつゝ、五穀成就福の神萬代不易ぞ目出たけれ、

# 蟲合戦物語

一

爰に中昔のことにや、廣庭のかたはらに、草村國の蟲のあるじをば、大將官蟠螂の大臣として、家に傳はる斧をとつて龍車に向ふ名將た



り、政事正しく、吹く風草木を動かさず、蟻といふ虫のうす引とき  
 は、五日の風枝をならさず、十日の雨土くれをうごかさず、露草の  
 三ツ葉四ツ葉の殿つくり、霜のうつばり露の貫、千種の色をかや  
 かす、御臺虫をば、はた織御前と申けり、くわほう目出度ふさかへ  
 させ給へども、御子のなきをかなしみ給ひ、其頃つき山の景に、熊  
 野の體をうつしたる、三寸四面の宮ありし、夫婦の蟲この宮にまふ  
 で給ひ、男子にても女すにても、虫の子さづけて給はれと、ふかく  
 きせいを掛け給へば、御臺虫の御夢想に、露の玉をのむと見給ひ  
 程なく懐胎ましくて、姫虫一つうみ給ふ、玉虫姫と名付けつ、  
 そだて給ふにしたがひて、ひかりかやく身めかたち、慕はぬ虫こ  
 そ無かりけれ、されども、玉虫定る夫の外にして、餘なる虫にはま

みへじと、一首の歌をよみ給ふ、  
 照月に光りあらさう玉虫に、心なかけぞ野邊の虫ども、  
 げに心なき虫めらが、近付ざる其爲には、毒くしきが然るべし  
 ととかげのつばねを、付置れ、玉虫の御座には、樟腦の砂をしき、  
 數多の虫を付給ひ、いつきかしづき給ひけり、又執權の虫どもには  
 倭兵太米虫、はたくのひげ長、其外數の虫共、羽をつらぬ髪をな  
 で、草の御殿にすだきよる、其比泉水のかたほとりに、澤邊の螢と  
 聞えしは、光る源氏の古の、螢の巻に心をよせ、いうにやさしき虫  
 なりけり、付したかう郎等には、渡邊の源五郎虫、坂田の井守のか  
 み、同じき一子屋守頭、うすいの箴虫、浦へのすゝむし、中にも平  
 井の火取虫、何れも聞ふるつわ虫なり、又築山のあるじをば、あら



かねの土蜘蛛とて、あくまでふてきのあぶれ物、類を以て集る蟲には、黒がねの蜈蚣左衛門、犬せりの谷のすけ、な虫いも虫柚の虫、其外數の悪虫ども、日夜の出仕ひまもなし、さればにや螢の君、かの築山の奥にある熊野まふでの折柄に、玉虫姫の御姿、いがきのひまよりかいまみて、猶羽ぬらす雨の夜の鳥、一口も何ならず。猫ふす野邊や小鮒よる、池のちひろに沈むとも、思かけにし玉ならば、羽ねはあれどもかちはたし、道ひく虫もと待折ふし、爰に紙虫といふ虫、古き草紙に住なれて、いともやさしき虫なれば、玉虫の御方へ、常はとふらひ参りしを、螢ひそかにかたらひ、紅葉がさねの薄様に、つくぐしの筆をそめて、書たる文こそやさしけれ、中々に戀に死すは、桑子にそなるべかりける、玉ゆへになみたつ

らぬく戀衣、つりさせてふきりぐす、なくや霜夜を明しかね、晝は日くらし暮しかね、我玉しひは身をはなれ、君がかたにも飛虫の、とび立斗りにこがるれども、さの、船橋とりはなし、命かけたるひを虫の、きゆるばかりぞしら露の

玉の緒の君さまへ

澤邊の身より

と書とめ、奥に歌をぞかゝれける、

音もなくおもひにもゆる螢こそ、なく虫よりも哀なりけれ、物おもへば澤の螢も我身より、あくがれいづる玉かとぞ見る、爰に、土蜘蛛がゆかりの虫、上臈脚の有けるが、今はやうく年よりて、お袋蜘蛛と名を呼ばれ、草村のかたはらに、巢をしつらひて居たりしが、これも折々玉虫の御前近く参りしが、あらまし聞よりも、



取る物も取あえず、草村を忍び出、つき山にはい上り、土蜘蛛に對面し、此由をつげれば、土蜘蛛聞てはがみをなし、なんぞや其のやせ螢、おのれがすねの火を取て、たとへしりにともす共、そも何程のぶんげんぞや、忝も某は、福蜘蛛といはれ、後ろに延命の袋をおひ、何につけても不足なし、たとへばいかなる玉虫も、我いふ事はそむくまじと、熊笹のひろき葉に、ふつゝかなる手ぶしにて、書たる文こそ不束なれ、

はづかしながら君ゆへに、戀の山くもつもりきて、今はうき身もすごもりに蠅をとるさへ力もなし、身こそむくつけなりとても、こころは高きたゞり蜘蛛、若も此戀叶はずば、くもてかくなは十文字、腹切蜘蛛と身をなさん、げにや蜘蛛の巢にじやん馬はつなぐと

も、二道かくることあらじ、うそじやと思召すならば、巢をくつさるゝ法もあれ、鶯のゑにはまれ、鴟のいばらにかゝらんと、すさまじきちかいを立、

お玉の君え

つちより

と見ぐるしく書きちらし、奥に一首の歌を書く、

玉蟲が、いとやいふならさゝかにの、くものふるまひ兼てしらせん、

玉虫姫はおもはずも、二つの文を見たまひて、いと恐敷く思召、母虫に告げ給へば、かそ色の虫おどろき、所詮なんたいをいひかけよと、あらましを教へければ、玉虫父母の教へにまかせ、中立虫に打むかひ我をしたはん虫たちは、ともし火を取り來れ、夫にせんとの



たまへば、二つの虫立歸り、かくかくと告ければ、蜘蛛つくつくと思案して、思い付けたり、燈火とは光る物の唐名ぞや、金がほしいといふとを、あからさまにはいはれずして、ちとかすらせたとおぼへたり、こがね虫がのぞみならば、いか程もおくらんと、小をどりしていひければ、袋蜘蛛をき、いやく左にては侍らじ、所詮是は難題を言ひ掛けたると思ふなり、如何してかは叶へんと、きのどくさうにいひければ、蜘蛛聞て打うなづき、それは何よりいと安しと、或る人の家に忍び入り、ともし火の本をめぐれば、人は是をとらへて、夜の蜘蛛にはさる事ありとて、椽がわに持て出て、をと、ひこいとて投られ、からく命たすかりもとの住家に歸りけり、去程に、螢の君四天王火取虫を近付けて、いが、はせんと評定ある、

坂田のいもり進み出でしからは某火に入りて、主のために身をこがし、一念むなしからずんば、君の影身をはなれじと、思ひの末は矢を通す石とうろうに飛入り、其身をこがして死にけり、さればればの中だちに、井守の黒焼するとは、此時よりぞ始まりける、扱こそ、夏虫の身をいたづらとよむ歌の夫は戀ゆる是れは又、主君の爲の忠の虫、我身を炎に焦せしより、むし、暑いと云ふことを、するの世までも申すとかや、螢は涙にくれ給ひ、一子の屋守を召されつ、此度井守が心ざし、いつの世にかは忘れんと、恩賞あつく給はりぬ、扱あるべきにあらざれば、名にしおふたる火取虫、其火を取て立歸り、螢のもすそにともしけり、今の世までも、螢火の光は、是より傳へたり、かくて螢の君、供虫數多召連れては、世の



きこえさがなし、ことさらもすそのとしも火のきゆるともや、有な  
 んと、用心の其爲に、油虫を御供にて、草村にわけ入り案内乞へば、  
 番の物ぼうふり虫、はさみ虫、つくぼうさすまた建ならべ、何虫な  
 るぞとがむれば、しかなくと答へける、番の虫内に入り此由をう  
 つたへける、かまさり奇異の思をなし螢よび入見給へば、ともし火取  
 て来りたり、跡につく油虫己が油に螢火の、影を盗みて是も亦、  
 火を取り来る如くなり、螢螂つくく見給ひて、一つならず二つの  
 虫、燈火取て来ると、螢螂が家の名に、光りかやくするそうぞや、  
 殊に螢が虫振、聲に取て不足なし、先づ壽の初とて、其頃御前に使  
 へにし胡蝶の内侍といふ女を、油虫にぞ給はりける、さればこそ末  
 の世に、我物いらすのよきとを、油虫といふとかや、油のなにかし

有がたく、鬘に油をぬりちらし、こてふを空にあふぎつ、そいろ  
 歌をぞうたひける、てふくとまれ菜の葉にとまれとはやしつ、  
 胡蝶の夢のさめぬまにと、伴ひてまかり立つ、扱又螢の聲入に、吉  
 日をゑらぶべし、卯月八日は吉日よ、髪さけ虫は待上臈、待し其日  
 になりしかば、螢が立装束には、黒さかり衣引つくるひ、緋の袴  
 ふみしたき、供虫數多召連、草村に入り給へば、かまさり夫婦祝  
 さ、のしつく菊の露、さかつきの數も重りて、扱米虫を召れつ、  
 此度の婚禮に、祝儀の能を興行せん、番組をよき様に計ふべしと有  
 ければ、米虫仰を承り、御前を罷立、螢螂夫婦も、草の御殿の奥  
 深く入給へば、玉虫たえなるこわねにて、たはむれ歌をぞうたひける、  
 扱もやさしの螢の虫や、忍ぶなわてに火をとす、



土蜘蛛の王子此由を聞き、大いにいかる氣色にて、足を廣げ目を見出し、とうひんをふくらかし、はじめ媒したりけるお袋蜘蛛を呼びよせて、おのれが中立あしき故、我戀をむなしくなすと、袋蜘蛛をとらへつゝ、大きなるもぐさをひねらせて、尻こぶたに灸をすへ、庭上に追ひ放せば、袋蜘蛛はたへがたく、かけ出し、二三遍めぐりしが、袋二つにさつとわれ、足をちゝめて死にけり、それよりも土蜘蛛は、惡虫共を呼集め、早押しよせんとひしめきけり、爰に一つの障りあり、此ほと亭主の物すきにや、泉水を掘ひろげ、築山園より草村園への境大河と成りし故、こすべきやうなかりしかば、幸ひ池の主たる蛙の三郎何がしは我にしたしき虫なりとて、手長の太郎水蜘蛛に、其いこんを語ひ含め、使者を立てぞ頼まれける、蛙の何がし承はり、い

たはしや蜘蛛殿、さぞ無念におぼすらん、それ井の内の蛙大海を知らずと申せども、我は居ながら名所を知る、かの住吉の浦にして、あまのみるめと詠せしは、蛙が歌にてあらざるや、又はうき世のたはれ歌、小田の蛙がないたんだと、諷ふも我等が噂なり、昔百姓が田をかへすとて、我知らず蛙の首を鉄にて切り、其後百姓僧に生れ、蛙は國の主と成り、かの僧帝都に参りしを、そう問申せば、大王は折節碁を打ち給ひしが、碁に切れといふ言葉を何となくの給へば、畏て官人共、かの僧の首を切る、是れ前世のむくひとて、蛙の一念かくの如し、又或る書には、蛙の子を、諸經をじゆする聲にもたとへ、いさゝか書札の言葉にも、蛙歌をとぐるといふとは、蛙のあゆみの文字ならずや、か様に申せば事堅し、又やはらけて申さんには、



古き歌にもかくばかり、

折にあへば是もさすがにあはれなり、小田の蛙の夕暮の聲

水口に我や見ゆらん蛙さへ、水のそこにてもる聲に啼く

かやうによまれし我なれば、其の花に啼く鶯めが、ほ、ほけけふと、えならぬ歌をさへづるとも、水に住める蛙とて、あまねく歌書にも載られ、又た音曲の外題にも、蛙と申すうたひあり、身で身を申すは如何なれども、居住のじんじようさ、上に付たるめざしをば、夕顔うらめといひ、可愛らしきものごしは、れんぼのあいさやう是なれや、水蜘蛛は聞よりも、何れを以ておろかならず、去り乍ら、某も大事の使者にて候へば、御返事あれかしと、たいくつさうにいきをつく、蛙聞て、尤なり、いまつきたまふいきにつけて、又面

白き咄あり、唐土の事かよ、がまてつかいといふ人あり、がまは蛙を愛し、てつかいは我形をわが息に吹き出す、我等先祖ひき蛙は、夕陽の雨の後、こくうに向つて息をふき、にじの姿是なれや、扱そにじといふ字は、虫扁に書くとかや、今も武士の家にある、ひきめの征矢と言ふとは、我先祖より傳へたり、水蜘蛛をきくよりも、扱々御先祖ひき殿は、いまだ此世にましますかと、さもむつましく問ひければ、蛙は両手をかしらへ上げ、せなかへ流るゝ涙を留め、されば我祖ひき蛙は、ある人に生捕られ、かばねをぬり盆の上にならし、くやしと思ふ一念油となりて流れしを、入水の人の目にぬりて其心をうることも、我先祖の徳ならずや、されば物をぢせぬ者を、蛙の顔へ水かかると、今以て申すとかや、さは言ひ乍ら、内心に慈



悲の二字をとなへつゝ、蓮の葉の上にしてうつくまりたる其形、佛の縁にも叶ふべし、又は祝義の一つにも、民の家にて八朔には、めすりなますと名付けつゝ、われをことぶくいはれあり、扱學問の道に於ては、小野のたかむら歌字盡にも、

幕 幕 幕 幕 幕 幕 幕 幕

かく作られし我なれば、わらんへの學問にも、手習ふ歌の讀みぞめ、すでに越王勾踐は、道のほとりの蛙には、龍駕をおりて禮をなす、又堂宮の御作にも、かへるまたと云ふとも、某が象なり、かほどゆゆしき蛙めも、頼朝時代の事なりしに、いつの奥の、かりくらにて、蛙合戦ありし時、さんくんに重手をおひ、かばねを陣外にさらし、木薬やの手に渡り、がまといふ薬にやならん、又は小兒の薬として、

二

くしを立て焼かるべきを、折ふし蛙どの御通りにて、不憫にやおぼしけれ、おばこといふ草の葉につゝみ、かへるどのおしにやつたと、御とむらひありしより、二度命よみがへる、此報恩にいざさらば、御道しるべ申さんとて、手長太郎水蛙をば、暇乞して歸けり、

扱其時蛙三郎は、いつも來れる赤とんぼう何がしに此由を語りければ、赤とんぼう承り、緋おどしの鎧きて、赤旗いくつもさし並べ、爰かしこに飛び散りて、水鉢南天寺の軒につるす風鈴を、力にまかせてゆすりければ、ひいき四方にちちたり、すはやむげんの早鐘ぞと、數多の蛙ども集り、泉水の面に柳の葉をうかめつゝ、土蜘蛛



をのせてぞ渡しける、是よりして今の世に、船といふと始りたり、  
 手長の太郎水蜘蛛、多くの虫に下知を爲し、水の逆巻く所をば、魚あ  
 りと知るべし、流れん虫には木の葉をだかせたかいかに力を合すべ  
 しと、さばかり泉水を、やすやすとこぎ渡り、草村園をおつ取り巻  
 き、寄せ来る駒のくつは虫、波にたゞへておびたゞし、草村の内  
 は、晝の酒ゑんに酔ひふし、聲を合する虫もなし、中にも兵太米虫  
 は、能の番組書き調べ、夜のふけるまで居たりしが光つわき能は、  
 蟪蛄の御家の海虫と定め、二番目の修羅事は彼是と思ふ内に、時の  
 聲を聞きつけ、すはしゆらむきこそ出で来れと、柴垣のゆひふしに、  
 其身輕げに這ひ上り、寄手の虫を見渡せば、まつしぐらにむらがる  
 體ねはんの庭と申すとも、かほと虫はよもあらし、去れども米虫

おどろかず、まい／＼つむりはいつくにぞや、角をだせやりをだせ  
 と下知を加ふる、折ふし、螢の君は、もとよりも、宇治石山にて年  
 々の螢合戦に利を得たる名將なれば、さわかずして松明うしろにか  
 いやかし、あれ追ッ散らせと下知すれば、米虫を先として、蚤しら  
 みの雑兵まで、蟻の如くに集り、東西へ切つて出る、かくて寄手の  
 陣より、へひり虫と名乗りて、出尻をまくつて引て入る、爰にむか  
 で左衛門黒皮おどしの鎧きて、百の足にたいまつ立て、一陣に進み  
 けり、草村の内よりも、とがけのつぼね遙に見て、米虫が羽をひか  
 へ、あのむかでこそ、みつからが年頃のかたきなれ、池の反橋の下  
 にして、あまたの子を生み候を、皆むかてめにぶくせられ、その無  
 念晴がたし、此度御身をたのみぞと、青いきついで語りければ、俵



兵太うちうなづき、くやくの虫の大弓に、山まゆの弦をかけ、蟬の羽にてはいたる矢をとりそへ、先祖の例を引く弓の矢の根につばきを吐きかけ、引つぼつて放つ矢をむかだが、眉間に請け留め百の松明一度に消え、大地にどうとたふれけるとかげのつばね尻を振りて、不束なる手を合せ、米虫を禮し、送物と覺しくて、赤銅にて拵へし、虫盡しの小柄一本同く鏡一面を米虫に與へつゝ、そも赤銅のいとくには、いかなる猛きむかでも、此小柄にて押ゆれば、五體すくみて動かす、また此鏡は、諸の虫の形を大きに見す、此二つの寶をば、身を離さで持たれども、今の御恩報じ難く、一つは我子の吊ぞと、かとの立たるまなこより、青き涙を流しけり、米虫辭するに能はず、二つの寶を請け取り、小柄をば、むかで除の其爲に、一の木戸の升

形に筋違て置しより、米虫が其家に、弦かけ升そと初りける、又一面の鏡より、虫目がねといふとを、同しく末世に傳へたり、寄手の勢を見渡せば、星かぶと引冠て、尻に矢筈の旗さしたる虫一騎、這ひ出で、辱くも某は梶原の末そんげしく平藏足廣と、さもいかめしく各乗りける、其頃蜂やじがの守、針持とて、青野が原の青大將熊ばらの長はんより三代目の悪虫にて、數多の虫をとらへて、我に似よといふとを、似成ぐとなへつゝ、皆我道に誘引し、少も背く虫あれば、重代の針を以て悉く刺殺すあぶれ者の有りけるが、或時牛の角にさしあたり、大きに耻辱を取り、暫く屏の内に巢ごもりして居たりしが、此度耻を雪がんと、蟻螂方に與力して、彼のげちぐに渡り合、針を後にひきそばめ、ぶうぶと言てかゝりけり、



げちんく大にあざわらひ、そもはりのいとくには、はせや小鮎はお  
 そるゝとも、虫のおぢたる例なしと、さもにくさげにのゝしれば  
 蜂聞て、おろかなり、凡針に恐るゝ物、必魚に限るまじ、虫の恐る  
 ためしには、疖の虫癩の虫痲氣、すばこの虫までも、針を以て治  
 するなり、殊に汝は悪虫にて、雨氣付たる折ふしに、人髪を洗ふに  
 は、汝がねぶりて禿となし、また人のよき中を、おのれが通れば間  
 を切る、忝も某は、數の薬の其中にも、蜂蜜とえらばれ、また某  
 の巢を取ては、露蜂と名つけ薬となす、汝がやうなる毒虫は、我が針  
 にてしりぞけんと、飛びかかり刺通す、さしものげちんく弱り果て、  
 宿の蜂殿むごいぞや、今は何をか包むべき、素より戒は毒虫の、さ  
 せるにて打殺せば、其かな物に毒をとめ、たばこの爲の仇となる、

御身の針もかな物なり、毒ばし残し給ふなと、言葉を残して死にけ  
 り、又兩鬚を泥にそめ、赤地の錦の草の葉を引かぶりたる虫一騎、  
 ゆうくと這出る、寄手の虫共之を見て、あれ打取れや面々と、名  
 乗る中にも先づ進む、手長の太郎水蜘蛛弓矢の方より這廻り、草の葉  
 をたゝみ上げ、二口に喰ひければ、らう虫の悲しさは、手長が下に  
 なる所を、押へて首をくひ切つたり、是ぞ田舎に住なれて、田の虫  
 送ると諷はれし、實盛虫とは後にぞ思ひ知られて哀なり、悪七兵衛  
 かげろふ、そこを引なと飛び出る、寄手の方よりまつ先がけ、みの  
 虫の四郎と名乗、かげろふちらくくと打笑ひ、鎧にあらぬ糞虫が、  
 着たる箕のゑりをとり、後へ引けば糞虫も、身を遁れんと引く程に、  
 引ちぎつてどうと臥す、鳥の海の山とんぼう、よつひいて放つ矢を、